

研究の実際 2

(グループ別研究の内容)

体のバランス、姿勢や運動面への指導・支援班

1 はじめに

本班は、小学部4名、中学部3名、高等部4名の教師で構成されている。第1回目のグループ研修で、小学部から高等部まで共通する給食指導場面での姿勢や道具の使い方など話し合った。体を安定させることが難しく姿勢が崩れてしまうこと、食器や道具、補助具の使用状況、箸への移行のタイミングなどについて意見を出し合った。そこで、食事場面に見られる手指の使い方を中心とした体の使い方の困難さに対し、児童生徒それぞれの事例を挙げて、個々の持つ課題について外部専門家からの助言を受ける研修を行うことに決めた。校内研修会でビデオに撮った食事の様子を参照しながら外部専門家から得た助言内容を、日々の指導・支援にどのように結び付けていくかをまとめることにした。

2 実際の取組

本班の教師がそれぞれ事例を挙げ、児童生徒の実態、課題に対して、南愛媛病院旭川荘作業療法士末澤先生からの助言と今後の指導・支援についてまとめた。

事例01 小学部

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・摂食えん下障害があり、子ども療育センターの摂食外来を受診している。水分はとろみを付け、硬い食物は1口大に切っている。 ・食べることにあまり興味がなく、受身なことが多い。口に手のひらを押し付けて食物を出し、投げることもある。 ・1口大のおにぎりやおかずを手づかみ食べしている。手のひらで食物を握り、手のひらを口に押し当てるようにして食べる。 ・普通大のおにぎりや、軟らかいおかず（卵焼きやハンバーグなど）を教師が持って口に近付け、かじり取りをしている。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・1口大のおにぎりやおかずを手のひら全体ではなく、手指だけでつかみ、口に運ぶこと。
助言・まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・現在の取り込みを見ると、口を閉じてのそしゃくができていない。口唇がうまく使えていない、舌がうまく使えていないという問題が見られる。教師がスプーンで介助して、口を閉じての取り込みやそしゃくの練習を継続して行うようにする。 ・現在のつまみ動作は不完全な挟み握りであるので、次の発達段階である挟み握りができるように母指を使ったつまみ練習が必要である。 ・手の機能を向上させる遊びには、米や小豆の中におはじきやビー玉を隠しての宝探しが良い。挟み握りを目指して、シール貼りやペグ差し、宝探し等、楽しく遊びながら母指を使う機会を増やしたい。

事例02 小学部

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・スプーンの持ち方は、上からあるいは下からつかんでいたが、食べこぼしが多いため、正しい持ち方を指導した。間違った持ち方をしているも、教師がスプーンを押さえて注意を促すと、自分から直せるようになっている。左手で食器を持つ指導も行っている。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・人差し指を使いたがらないので、上手に使っているように見えてもぎこちない。食事場面以外でも人差し指を使う練習をしている。フォークで刺す動きがなかなか身に付かない。
助言・まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・フォークの持ち方にはこだわらず、柄を太くして刺しやすく工夫されたフォークを使用する。刺しにくい食物は切り、丸い物でも転がらずに食べることができるよう切り、切った面を皿に当てて置く。 ・フォークを側方つまみで使用できているので習慣化を図る。次のステップとなる箸への移行については、母指と示指が対立する運動をして、手の中の筋肉（母指の下の膨らんだところ）を育てることが必要である。児童は作業療法でもバネ箸を使用しているため、バネ箸を使用して挟む練習をしていくのも良い。

事例03 小学部

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・食欲があり、偏食もほとんどない。皿は自助食器で、茶碗や汁椀は普通のものを使用している。スプーンやフォークで自分で食べるが、食べこぼしが多い。 ・ふだんから主に右手（利き手）だけで操作しようとする。食事場面では、言葉掛けがないと、左腕は肘をついて食器を持たずに食べていることが多い。 ・食器を持つよう言葉掛けをすると、縁をつまんで持ち胸元に押し当てて安定させているため、うつむいておかずや御飯をすくった後、顔を上げて口に運び食べている。 ・日常的に、手元や注目すべき箇所を見ていないことが多い。食事場面でも、持っていた食器を皿の上に置いたり、傾いてこぼしてしまっても気付かない。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・左手で食器を安定させて持ち、こぼさないようにすくって食べる。
助言・まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・エジソン箸の指の大きさが合っていない。箸の操作の発達を促すためには、バネ箸が適している。バネ箸は、バネで自然と開くため、箸を開く感覚が身に付く。負担にならない範囲でつまみやすそうなおかずはバネ箸を使用したい。 ・口に運ぶたびにスプーンを置くが、連続的な使用を促すように介助者はスプーンに手を軽く添えて、操作は児童にさせる。左手で食器を持って食べる時にもスプーンを連続的に使用して食べるよう、手を添えて操作を促したい。 ・左肘をついて食べるのは、体を安定させて食べるためであり、姿勢保持の

	<p>ために疲れている様子も見られる。左肘をつくことで上体が左側に傾いてしまっているため、上体をまっすぐ保つために左手首をついて安定を図るようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体幹の筋力が弱いようなので、全身を使った遊びを積極的に行う。遊びの例として、トンネル遊び（四つばい）、ジャングルジム（肩の力）、ブランコ（腹と背中筋力）、トランポリン（全身筋力）、手押し車やスクーターボードを手で漕ぐなど。 ・食事中に疲れているように見える場面がある。箸の練習も大切だが、その際の表情や本人が発しているサインを見逃さず、食事が楽しい時間となるように無理のない範囲で行うよう気を付ける必要がある。
--	---

事例04 小学部

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・御飯や汁椀は普通のお椀を、先割れスプーン、自助食器皿を使用している。皿をよく見てすくおうとするが、うまくすくえないときに左手で押さえるなど、両手を使おうとする。スプーンにたくさん載ると落として、すくう量を調整し始めた。お椀を置いたまま動かないように押さえて食べる。教師がお椀を持つように促すと持って食べるが、どちらとも食べこぼしが多い。 ・みかんの皮をむきやすいようめくり上げると、その部分を自分でむこうとする。ソース等の小袋の口を開けるときは教師に頼む。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・手首を使ってすくう。お椀を持ってこぼさないように食べる。 ・みかんの皮をむいたり、袋の切り口を開けたりする。
助言・まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・スプーンですくうときに両手を使おうとするのは、スプーンの操作がまだうまくないため、皿を正面にすくいやすい配置にする。 ・手首を使う様子は見られるため、手首の使い方を問題視する必要はない。スプーンの形が児童には操作しにくいようだ。ピストル型のスプーンだともっと手首を使えるようになる。介助スプーンについて保護者と相談していく。 ・切り口がないと破れないのは、力を入れる方向が分かっていないため、切り口を入れて破る練習を続ける。画用紙や段ボールなど厚手の紙で練習すると破っている方向が分かりやすく、破る方向を覚えるようになる。

事例05 中学部

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活レベルの会話は、楽しくやり取りができる。 ・食物が小さくなると、箸でつまみにくくなり、皿を口に当てて掻き込むようになる。 ・座った状態で、背筋を伸ばして姿勢を保持することが難しく、数秒で机にあごを載せたり、指をくわえたりする。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・器に盛ってある物を、最後まで、箸でつまんで口まで運ぶ。 ・座った状態で背筋を伸ばし、姿勢を保持する。

助言・ まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・食事の時間は楽しい時間として捉えたいので、多少の掻き込みは必要だとも思われる。 ・背筋を伸ばした姿勢を保持するためには、運動による体の筋力を付けることも大事だが、机の高さを調節したり、椅子に敷く補助具（ピントキッズなど）を使用したり体に応じた環境調整も考えたい。日常生活の中で姿勢をずっと意識するのは難しいので、食事の場面だけでも補助具を使うのは効果的である。
------------	--

事例06 中学部

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・簡単な言葉の指示は理解している。箸を自分なりの持ち方で使用する。麺類の細い食物は箸で刺したり、皿を口に当てて箸で流し込んだりすることが多い。適当な大きさの食物はつかんで食べるが、そのうち皿を口に当てて箸で流し込み始める。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・皿を口に当てて流し込まず、左手で持ち、箸でつかんで口へ運ぶ。
助言・ まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・自分なりの握り方で箸を使うことができている。クロス箸になるのは、十分な指の対立筋が育っていないからだと思われる。バネ箸を使ってつまむ練習ができるが、持ち方を直すことによって、食べるのが楽しくなくならないように留意する。 ・挟む動作の練習は遊びの中で tong やピンセットを使ってつまむ活動をするとうい。挟む力がついてからつまむ力が付いてくる。

事例07 中学部

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・口の中に食物を多く入れ過ぎるため、食べ始めに「ゆっくり食べる。」と言葉掛けしている。また、スプーンで食べると入り過ぎるので、箸で食べるようにしている。 ・お椀を持つと手についたご飯が気になる。 ・指示が多くなると反動行動（指示とは逆の方向に動く）が多くなる。そうなるとなかなか次の行動に移せないことがある。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・口の中への食物を入れ過ぎないようにする。 ・どのような支援をするとスムーズに動けるようになるか。
助言・ まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・一口の量を覚えるためには小分けにした方がよい。おう吐するほど入れ過ぎるのでなければ、しっかりとかむ練習をする。口いっぱい頬張って食べたいのなら、本人の食べ方で食べたら良いとも考えられるが、よくかむよう言葉掛けをし、飲み込むときに喉に詰まらせないように支援する必要がある。 ・手についた御飯を自分で拭くように、横にぬれたおしぼりを置く。 ・反動行動は支持に対するストレス反応であるので、指示を必要最小限にし、見守りも大切にする。

事例08 高等部

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・箸の持ち方が握り箸になっている。全てではないが、食物を挟んで食べることもある。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・正しい箸の持ち方に近づく。
助言・まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・掻き込んで食べて、早くお腹をいっぱいに満たしたいタイプの生徒である。握り箸ではあるが、上手に使えている。高校生にもなると、自分の持ち方が確立されている。 ・握り箸の持ち方を直し手の中の筋肉を使う練習をするためには、バネ箸を使うと効果的である。

事例09 高等部

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・中指と人差し指の2本が箸の上側にあり、持ちにくそうにはしている。食べるスピードが遅いわけでもなく、食物もつかめるため、本人は不自由さを感じていない様子である。 ・箸で小さい物をつまみにくそうだったり、皿を口に当てて箸で口の中に流し込んだりしているときもある。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・箸の持ち方を意識する。
助言・まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・本人が不自由さを感じていないようなら箸の持ち方を気にしないであげてほしい。 ・この生徒の持ち方だと小さい物はつまみにくいので、喉に詰まらせたりしないのならば、掻き込んで良い。多少食べ方が汚いと思っても、これがこの生徒の食べ方だと認めてあげることも必要である。

事例10 高等部

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・食べこぼしが多い。 ・椅子を後ろに引いてしまい、猫背になり姿勢の保持が難しい。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・スプーンを用い、一度にすくう量を調整する。 ・正しい姿勢の保持
助言・まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・身長に対し、机がかなり低かったため、盆の下に食事台を置いて体に合った高さに設定する。 ・食器に手を添えなくても上手にスプーンを使い、添えさせると嫌がる。片手だけでも上手にすくって食べ、うれしそうな表情をしている。「食器を持たなくても食べられるんだ。」という生徒からのサインだと受け取るようにしたい。 ・スプーンの大きさを変えて、すくう量の調整に対応する。 ・楽な姿勢で食べられるよう姿勢保持の補助具を使用する。

事例11 高等部

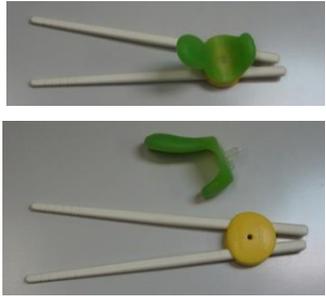
実態	<ul style="list-style-type: none"> ・利き手は左手で、手の甲を上にしたままスプーンを親指、人差し指、中指でつまむように持ち、自助食器皿の手前から奥にスプーンを動かして食物をすくい、口に運んでいる。 ・食事中、右手は体側に垂らしたままで器を押さえたりはしない。 ・発作が多く体調が不安定で、継続した指導が難しい状態にある。 ・9月下旬から口を開けようとせず、食事を拒否するようになった。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・手首を柔らかく使ってスプーンを持ち、口に運ぶ動作を習得し、食べこぼしを減らす。 ・右手を用い、食器を押さえたり体幹を支えたりすることで安定した姿勢で食事をする。
助言・まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・①利き手の動きについて、興味のあるものを操作する場面で手首を使う動きを引き出すこと。②両手で物を押さえる必要のある活動を取り入れ、右手の使用を促すこと、の助言を受け、窓の鍵やドアノブを操作する教具を作成したり、作業工程を工夫したりした。 ・9月から食事を拒否する状態が続き、その後も体調不良により指導ができなかった。体調の回復を待って指導を再開したい。 ・作業学習では、動作支援を入れながら両手を使って厚紙に紙を貼る活動を取り入れた。右手で紙を押さえようとする動きが見られる場面も出てきており、指導を継続したい。

3 支援グッズ紹介

本校の児童生徒が使用している支援グッズ及び南愛媛病院旭川荘作業療法士 末澤先生から紹介された支援グッズを紹介する。

番号	支援グッズ (写真)	用途や使い方などの紹介
1		<p>「持ち方の形に合わせて作成されたスプーン」 (旭川荘南愛媛病院製作)</p> <p>児童はスプーンを上から握る持ち方(回内持ち)だが、下から持ち手首を使ってすくうことができる。</p> 

2		<p>「お湯でやわらかくなるねんどイロプラ」 写真1の支援グッズを作成することができる。マジックや鉛筆などいろいろな道具に活用を広げることが可能である。 百円均一の店で税込108円で販売している。</p> 
3		<p>「軟らかい素材のフォーク」 軽くて持ちやすい素材になっている。フォークの先が上を向いていて、刺さりやすい形になっている。同タイプのスプーンもある。</p>
4		<p>「バネ付き箸」 箸を2本そろえて持つのが難しい実態の児童生徒が使用している。箸を人差し指、中指で支えなくても、人差し指と親指で力を加えらるとつまめる仕組みである。</p>
5		<p>「支援皿」 スプーンやフォークを使うが手首を返してすくうのが難しい実態の子どもが使用の対象である。皿の立ち上がった壁面に当てることにより、スプーンに食べ物を載せることができる。</p>
6		<p>「滑り止めシート」 必要な大きさにカットして使用する。トレイの下に敷くことによってずれないように支援ができる。</p>
7	<p>① </p> <p>② </p>	<p>①「プロト・ワンチューブ／グripper」 ②「スポンジ」 (エチレンプロピレンゴム製) 介護用品 筒状のもので中にスプーンやフォーク等の柄を入れて柄を太くし、持ちやすくする。</p>
8		<p>「くるくるグリップ」 くるくる巻きつけるだけでいろいろなもの（スプーンやフォーク、歯ブラシ、鉛筆等）を持ちやすくする。ハサミで簡単に長さを調節することができる。らせん形状なので中までしっかり洗えて衛生的である。</p>

9		<p>「箸ぞうくん2」 持ちやすく大きく湾曲した形状で、無理なく自然と手の中でフィットし、楽に持てる。箸先の内側が平面で、滑り止めがついているため食物をつかみやすい。</p>
10		<p>「楽々箸（グリップタイプ）」 箸・箸先がうまく合わず、食物を口に運ぶ途中で落としてしまう人やつかみにくい人に適している。グリップは着脱式で、箸を抜いて洗える。ソフトな握りと軽さが特徴である。</p>
11		<p>「箸補助用品」名称不明 親指を置くグリップは写真下のように取り外しができる。使用状況に合わせて、段階的に使用できる。</p>
12		<p>「ピーエーエス ピントキッズ」 素材はポリウレタンHRフォーム。姿勢を伸ばすことを強制するのではなく、子供が座ることを楽に感じる体勢へと体を導く。いつもの椅子に乗せて使用する。</p>

※7～12は南愛媛病院旭川荘から紹介されたもの。

4 おわりに

食事指導の場面は基本的な生活習慣として教育的観点から正しい姿勢や道具の使い方を繰り返し指導・支援を行っているが、子供の表情などから発するサインを受け止めたり、それぞれの食べ方を認めたりすることも生活の質を高めていく上で大切だと研修を通して気付かされた。子供への合理的配慮の観点からは、豊富な情報の中から、手指の使い方や姿勢の安定を補助するなど一人一人の実態に応じた支援グッズを選択することが、子供たちに寄り添いながら生活の質を高めていくことにつながっていく。研修を通して児童生徒の実態に応じた指導・支援の見直しにつながる助言を得ることができた。研修後も継続して指導・支援を行い、また事例に挙げてはいない児童生徒にも広げられるよう研修の成果を継承していくことが今後の課題である。

言語・コミュニケーション面への指導・支援班

1 はじめに

言語・コミュニケーション班は、小学部8名、中学部5名、高等部8名の教師で構成されている。第1回目のグループ研修では、児童生徒と日々接する中で感じている課題や支援方法についての疑問点や悩みなどについて情報交換を行い、外部専門家への質問等をまとめた。第2回目のグループ研修では、南愛媛療育センターより言語聴覚士の鈴木先生を外部専門家として招き、モデル授業の参観や講義形式の研修会を行った。モデル授業では、小学部の児童を対象に南愛媛療育センターの療育で実際に行っている内容を鈴木先生に実施していただき、その様子を参観した。

2 外部講師によるモデル授業研修

(1) 小学部2年男子児童

ア 実態と課題

実態	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活での言語指示理解は通るが、発語は難しい。 現在、朝の挨拶やお礼など発声できる言葉が増えてきている。発声の仕方としては、例えば朝の挨拶であれば「お・は・よ～」と一音一音切るような感じ。 読める平仮名は10文字弱で、身に付きにくい。 コミュニケーション手段として、休み時間に行きたい場所のカード、数字カード、トイレカード等を身に付けている。 タブレット端末でコミュニケーションアプリを使う練習を始めた。
課題 ・ 質問	<ul style="list-style-type: none"> 将来トーキングエイド等を使ったコミュニケーションを行うために、平仮名の読みを身に付ける必要があると感じている。しかし、なかなか身に付きにくい。 発語の代替手段としてICTなどを活用していく方が良いのか、発語の練習をしていくのが良いのか。 発語があまりみられない子供は、平仮名の学習が難しいのか。また、効果的な学習方法はないか。

イ モデル授業の流れ

課題	ねらい
1 パズル 2個のサイコロを振り、その数だけパズルのピースを取り、枠にはめる。	<ul style="list-style-type: none"> たくさんある物の中から指定されたもの(個数)を取る。 理解できる語彙を増やす。
2 絵カード 指示された動詞カードを取る。	
3 お手伝い 離れた場所にあるカードの中から言われた物を取って来る。	
4 絵カード 絵カードを取る。	<ul style="list-style-type: none"> 三語文を順番通り覚え、順番通り再生する。 一人で複数の絵カードを連続して使用する。
5 色分け 付箋に書かれ色と同じ色の絵カードを	

置く。 6 書字の練習 絵カードと平仮名を書いた物を見て、 平仮名を書く。	る。 ・見たことを記憶し再生する。
--	----------------------

ウ 課題・質問に対する助言

対象児は就学前にはほとんど発語がなかったが、入学後急激に発語が増えている。今後の伸びが期待できるので、ICTを使ったコミュニケーション、構音練習の両方を行っていくのが良い。文字を読む力が付くと、発語量も増えていくと思われる。読みの指導を優先するほうが良い。

発語があまり見られないから平仮名の学習が難しいというわけではない。平仮名の学習方法には2つのタイプがある。「あ・い・う・え・お」のばらばらの一文字ずつを学習する方法と、「りんご」「みかん」のように、まとまりとして記憶していく方法がある。どの方法が合うかはその子によって違うので、実態把握をしっかりと行い、個に応じた支援を行っていく必要がある。

エ 今後の取組

毎週1時間チャレンジタイム（個別指導の時間）を取り入れ、今回のモデル授業で行っていた課題に取り組んでいく。

朝学習の時間に、タブレット端末のコミュニケーションアプリを用いた活動を行う。

発音を意識させたいときは、目線を合わせて教師が口をはっきりと開けて一音一音話すようにする。

(2) 小学部3年男子児童

ア 実態と課題

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・有意味の発語は少ないが、名前を呼ばれるとはっきりと返事をする事ができる。 ・1音ずつの模倣ができつつある。2音や3音になると、最後の音のみを模倣する。 ・コミュニケーションとしては、「先生、開けて。」「先生、お願い。」というような簡単な注意喚起と要求は言葉と身振りで伝えるように指導している。給食時には、欲しいおかずを指差して「お願い。」の身振りをして要求する。
課題 ・ 質問	<ul style="list-style-type: none"> ・無意味な発語は多く、常に一人で発声しているが、それがコミュニケーションにつながっていないことが多い。 ・困った時には「ん？ん？」と言いつつ続けたり、教師の手を引っ張ったりするため「先生。（肩をトントンとたたきながら）と呼ぶんよ。」と伝えると、「せんせ。」とすることができる。身振りと一緒に言葉でのコミュニケーション力を高めたい。 ・現在は、様々な言葉をゆっくり1音ずつ模倣し、発声することを練習している。今後、2音、3音と発声できるようにするにはどのような指導をしたら良いのか。それとも、他の方向で指導するべきなのか。

イ モデル授業の流れ

課題	ねらい
<p>1 パズル VOCAを使ってやり取りを行い、ピースを受け取る。</p> <p>2 絵カード 指示されたカードを選んで取り渡す。</p> <p>3 色分け 4色に色分けしたカードを、対応する色のトレー上に置く。 トレーの間隔を開けたり、少し離れた場所に置いたりし同じことを行う。</p> <p>4 お手伝い 絵カードを使い、相手に伝え指定された物をもたらってくる。</p> <p>5 食器の片付け・分ける 食器（コップ、皿、スプーン）を分ける。</p> <p>6 絵カード 離れた場所にあるカードの中から指定された物を選んで取ってくる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・人に注目する。 ・単語の理解を増やす。 ・言葉掛けしたことを、連続して自分で判断して行う。 ・視野を拡大する。 ・カードを見せたり、カードをたたいたりして伝える。 ・聴覚的記名力を身に付ける。 ・イメージを持ち続ける。

ウ 課題・質問に対する助言

なかなか話さなくても、ふと話し始める子供もいる。今は、まねをして言うことが大切だと思う。話し始めの段階では、1音の模倣でも良い。物の名前や動詞を覚えていくようにし、理解語彙を増やしていく。本人が指差した物を言葉のまとまりで伝えるようにしたほうが良い。大きい、小さいなども見本があれば生活の中で覚えていくようになる。

エ 今後の取組

いろいろな課題が言葉の理解につながっていることが分かった。指導中、本児が考えて動こうとしている様子がよく分かり、指導の参考になった。言葉の指導については、発声にこだわらず、身振りなどをたくさん取り入れるようにしたい。

助言されたことを意識しながら指導する中で、本児は教師がする身振りを覚え、覚えた身振りで伝えようとしたり、身振りと共に自分なりに発声して伝えようとしたりすることが増えた。また数字や文字への興味も少しずつ出てきており、みんなと一緒に数える活動を楽しんで発声したり、時間割ボードの数字や曜日、絵カード等を指差しながら一人で発声したりする様子も見られるようになった。今後も本児が楽しみながら言葉の理解やコミュニケーションについて学習できるように実践していきたい。

3 校内の事例

事例01 小学部

実態	言葉を使ってコミュニケーションをとっている。自分で考え、大人に対して欲求を満たすよう働き掛ける力を持っている。言葉の指示を理解して行動したり、相手の意図を読み取って行動したりすることも可能である。しかし、物に名前があることを理解して使おうとするが、正しく発音することが難しいため音が跳んだり別の音に変化したりして自分が言いたいことが相手に伝わりにくいことが多い。
課題・質問	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意図を正確に相手に伝える。 ・相手に聞き取りやすい発音を心掛ける。 ・療育担当のSTからは、まだ言葉話し始めて間もない段階のため特別な指導が必要という訳ではなく、通常の間わりの中で気長に正しい言葉を使って働き掛けたので良いということであったが、本人が楽しんで継続して取り組めるような発音トレーニングがあれば教えてほしい。
助言・まとめ	<p>言葉の習得段階を理解しないと、児童にとって過度な要求をしてしまう可能性がある。</p> <p>日常的に繰り返し言葉を使っていると、理解したり模倣したりして習得していくこともある。言葉のシャワーを浴びさせることが大切になる。</p>

事例02 小学部

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活での言語指示理解は、具体物を指差してやり方を見せれば理解して行える。発語はなく、感情を伝える時は泣いたり怒ったりして伝える。 ・現在、興味・関心のあるものに対して手を合わせて「お願い。」の仕草をしたり、給食時のおかわりを頼む際には「ちょうだい。」の仕草をしたりする練習をしている。1学期に比べると教師に要求する場面が増えてきたように感じる。
課題・質問	<ul style="list-style-type: none"> ・ふだん関わっている教師以外の人に「お願い。」の仕草をしても、何を要求しているのか伝わらない。 ・児童の感情や要求が周りの人に伝わるように、写真や絵カードを使う機会を増やしていきたいと考えている。対象児童は言語指示理解が難しい段階であるが、写真や絵カードを利用する以外に効果的なコミュニケーション手段があれば教えていただきたい。
助言・まとめ	対象の児童にカードを提示した場合に、どれだけカードの意味が分かっているのかを教師が把握した上でカードを使用し始める必要がある。

事例03 小学部

実態	今年度、小学校特別支援学級から転入学した。小学校では担任の他に支援員がついていたので常に一対一で活動していた。4月からは、クラスメート3名に教員2名という環境に変わり、常に一対一の関わりではなくなった。1学期は、何かしようと誘ったり、するように言ったり、まずは手を振って断るような様子が見られた。「タンタカタン」「あっあー」等自分なりの音は出せる
----	---

	が、言葉としてはない。
課題 ・ 質問	<ul style="list-style-type: none"> ・半年過ぎ、毎日繰り返している指示はほぼ分かって行動しているように見受けられることが増えた。するのか・しないのか、どちらに行くのか二つ指を示して取らせるようにすると、自分の意思と思われる方を取ることが増えた。音としては表出しているのので、何とか言葉として表出言語を獲得させたいが、まねて言わせようとしてもほとんど出ない。（挨拶言葉は「おはよう。」→「お」「バイバイ。」→「バ」）歌であればそれらしく、「とんとんとんとん」「手はおひざ」と歌っていることがある。 ・今、自分の中に言葉を貯めている時期だとは思いますが、自分の言葉として使える言葉も増やしたい。模倣して言わせるようにする方が良いのか。今のペースで良いのか。しないほうが良いのか。
助言 ・ まとめ	<p>理解することが先で、その後、話すことが出てくる。今の段階では、言葉が出るには難しいと思われるが、見本を見てできることから見本がなくてもできるようにしていくと良い。</p> <p>「いや。」「うん。」を自分なりに意思として表現している。正しく理解できないまま返答していることもあるが、聞かれたことに否定のみで答えないようになってきた。</p>

事例04 小学部

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の気になる物は衝動的に触りに行く。 ・平仮名、片仮名、簡単な漢字を読むことができる。 ・視覚的な手立てがあると理解しやすい。
課題 ・ 質問	<ul style="list-style-type: none"> ・教師にしてほしいことを単語で伝える。 ・「〇〇を？」と聞き返すと「ください。」などと言うことができる。 ・二語文や三語文の要求を教えるために、その場面で言い直させているが、他に方法はあるのか。
助言 ・ まとめ	<p>二語文や三語文を覚えて伝える練習、文で続けて言う練習を行ってみてはどうか。</p> <p>係の仕事で、職員室に入室するときの挨拶を覚えて言うことに取り組んだ。視覚的に文字で書いた物を提示することで比較的早く覚えた。教室では、欲しいものを要求するときに単語で伝えてきたときには手本を聞かせて言い直すようにした。</p> <p>児童がきちんと伝えていないときに反応しないでいると、自分で考えて文で続けて言うことがあった。</p>

事例05 小学部

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の好きなものへのこだわりが強く、特定の好きなアニメのキャラクターの本を好んで見る。特定の映像を繰り返し見続ける。（E-girls おどるぽんぽこりん） ・自分が気に入らない映像は見たがらず、離席したり声を上げたりする。
----	---

課題 ・ 質問	<ul style="list-style-type: none"> ・カードを使って頼まれた物の買い物やお遣いをする。 ・体全体の筋肉が硬いことにより、少しの段差などで転倒しやすい。バランスボールを使って、バランスを保ちながら何かをする（カードを選ぶなど）ことは、試みて良いだろうか。
助言 ・ まとめ	<p>転倒に気を付けてバランスボールを使って活動する（他のことをする）ことはかまわない。</p> <p>椅子に座るときの姿勢に気を付けてみると良い。</p>

事例06 中学部

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活での言語指示は理解するが、発語がほとんどない。 ・現在、自分の意思を伝える時に教師の肩をたたいて、「ああ。」「はあ。」と言った発語をするようにしている。また、絵カードを用いて自分の意思を伝える練習をしている。
課題 ・ 質問	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意思を教師に伝えてから行動する。 ・現在、絵カードを用いて教師に少しずつ自分の意思を伝えてから行動することができているが、次のステップとして、どのような指導をしていけば良いのか。
助言 ・ まとめ	<p>次のステップとして、自発的に行動させるために教員が指示をするのではなく、自ら気付かせて、絵カードを取りに行くようにさせる。自発的に行動することで生徒本人の中で習慣的なものになっていく。</p>

事例07 中学部

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・知っている歌は大きな声を出して歌うが、困ったことがあるときや、自分の意思を伝える場面では、発語がないことがある。 ・教師と一緒に確認をするが、発音が不明瞭である。 ・理解語彙が少なく、言葉掛けだけでは、活動内容が理解できていないことが多い。
課題・ 質問	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意思を、声に出して伝える。 ・理解語彙を増やす。
助言・ まとめ	<p>発音や発語は理解するより難しい。今できていることのバリエーションを増やすほうが良い。</p> <p>指示を出す前に理解言語を増やす。</p> <p>絵カードに文字を示し、自分の意思を伝える練習を行った。場面によって伝える言葉を理解し、声を出して伝えることが増えた。</p>

事例08 中学部

実態	<p>理解言語が少なく、指示が分からないことが多い。人の行動を見てから動くためか、活動全般に時間が掛かる。発語はあるが発音が不明瞭なため、分かりにくい。文字を書いたり、絵カードを使うことにより、意思表示することも増えてきている。</p>
----	--

課題・質問	<ul style="list-style-type: none"> ・周りのスピードに合わせて行動する。 ・急いで動けるように言葉掛けをしても本人が必要を感じていないのか、急ぐ様子はあまり見られない。どのような対応をすれば良いのか教えていただきたい。
助言・まとめ	<p>本人が急ぐ必要を感じていないのでスピードを求めることは難しい。今できていることを伸ばしていく方が良い。</p> <p>場面に応じて緩急をつけた行動を求めるようにした。</p>

事例09 中学部

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活での言語指示理解は通るが、発語は難しい。 ・現在、「おはよう」では、「お、お。」と言ったり、「さようなら」は「さ、さ。」と言ったりする。一音一音は発音できる音が増えてきている。 ・コミュニケーション手段として、音声言語も一つの手段として考えてみたい。
課題・質問	<ul style="list-style-type: none"> ・日常的に発音しようとする意識付けができていない。
助言・まとめ	<p>うまく言えなくても伝わったという喜びを感じられるような工夫をする。指示を聞いて動くことを大切にする。</p> <p>日常生活の場面の中で、確実に指示を伝えてから行動を促すよう心掛ける。</p>

事例10 中学部

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・簡単な指示を理解し行動することができる。会話はオウム返しになることが多いが、自分が気に入った言葉を何度も言ったり、その言葉を使って教師と簡単なやり取りをして楽しんだり、「しゅうまい」「まいしゅう」などと言葉遊びをして楽しんだりする姿が見られる。 ・「トイレに行く?」「いかん。」「いる?いらん?」「いる。」など、簡単な質問に答える。 ・嫌なときや欲しい物があるときなど自分の気持ちを伝えるときに「んー。」と怒ったような声を出し、教師の手を払いのけたり、欲しい物に手を伸ばしたりして伝えようとする。
課題・質問	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意思を周囲に伝える。 ・嫌な時や欲しい物がある時も伝え方が同じなので相手に伝わりにくいことがある。欲しい物や、して欲しいことがある時の気持ちが周囲の人に伝わりやすくなるように、どのような方法があるのか、また、どのような支援をすればよいのか教えていただきたい。 ・静かにしなければいけない場面で、声を出さないようにすることができにくく、絵カードや身振りで静かにすることを伝えると「しー。しー。」と余計に声を出してしまう。どのように伝えたり支援をすれば良いのか教えていただきたい。

助言・まとめ	<p>欲しい物を伝える場面で、絵カードを使ってみてはどうか。</p> <p>他のこと、例えば何かを見ていたり手で触っていたりしている間は、声が出にくくなるのではないかと思う。</p>
--------	---

事例11 高等部

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・自閉症。自分からの発語はない。 ・「トイレに行く？」の質問に対して「ない。」と言ったり、したくないことを質問されて「いや。」などと答える。 ・電子辞書に「おりがみ」と入力して昼休みに折り紙がほしいという意味を伝える。折り紙は特に何かに使わわけではなく、机の中にためている。辞書で要求する語は今のところ「おりがみ」のみで、今後単語を増やしたい。
課題・質問	<ul style="list-style-type: none"> ・口で簡単な要求を伝えるようになってほしいという保護者の希望があり、要求を伝える手段を確保したい。 ・電子辞書で伝える単語数を増やすにはどうしたら良いか。 ・「〇〇をください。」「〇〇を貸して。」など簡単な要求を自主的に伝えられるようにするにはどうしたら良いか。
助言・まとめ	<p>生徒から発信してもらうことをコミュニケーションと呼ぶことが多いが、それは生徒にとっては難しい。受信（理解）することのほうが大切である。発信することより、相手の言っていることを受信する力のほうが先に伸びる。どのような手段でも良いので（電子辞書、書く、絵など）受信する力（理解する力）を伸ばしたほうが良い。</p>

事例12 高等部

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・学校では声を出さないが、家庭では意味不明の言葉を発し、「父さん」とはつきり言うこともある。 ・欲しいものを指差したり「ください。」「いらない。」をジェスチャーで伝えたりする。 ・楽しい時、おもしろい時には大きな声を出しうれしそうに笑う。
課題・質問	<ul style="list-style-type: none"> ・語彙を増やす。コミュニケーションの方法を増やす。 ・語彙を増やすために効果的なタブレット端末のアプリの活用について知りたい。
助言・まとめ	<p>タブレット端末の活用よりは、人とやり取りをしながらのほうが言葉は覚えやすい。実物や、生の声で支援していった方が効果的である。写真などを見せて、物の名前を覚えていくことにタブレット端末を活用するのは良い。</p>

事例13 高等部

実態	<p>特定の友達とは大きな声で話す。授業中や大勢の前、困ったとき等は声が出なくなってしまう。着替えのときやトイレに行った時等、人の少ないところでは楽しく話をすることもある。</p>
----	--

課題・質問	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の気持ちや状況を適切に伝えること。 ・なかなか言葉が出ないときに、どのように支援をすれば良いか教えていただきたい。（「できました。」の報告など、言うことが分かっているにもかかわらず言葉が出ないことがあるため。）
助言・まとめ	<p>どうしても言葉で伝えることが難しいのであれば、カードで伝えることも一つの方法として有効である。あまり無理はさせないようにし、その子供のペースで取り組んでいけば良い。</p> <p>「〇〇先生。」とまず言葉を掛けるようにすることで、スムーズに報告ができるようになった。褒められるとさらに自信が付き、より意欲的に報告をするようになった。</p>

事例14 高等部

実態	自分が思ったことを周囲の状況、相手の状況を考えないで発言することが多い。
課題・質問	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の気持ちを優先することが多く、相手の周囲の状況を考えず発言したり、同じ質問を何度も繰り返し行ったりする。（質問内容は、自分本位のもの） ・現在同じ質問は3回までとルールを決めたり、相手の状況などを考えて発言するよう促したりしているが、なかなか定着しない。 ・自分の気持ちを抑えて行動（発言）できるようにするためにはどうすれば良いか。
助言・まとめ	時間で区切って質問タイムを設けるようにしてはどうか。質問をすることで気持ちの安定を保っていることもある。しゃべらない時間を確保するようにしてはどうか。

事例15 高等部

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活での言葉による指示理解はあるが、自分から発語することは少ない。 ・現在、身振り手振りでの意志表示を行い、必要に応じて、「お願いします。」と発語することができる。 ・家庭では普通に会話もでき、友達に電話もすることができる。
課題・質問	<ul style="list-style-type: none"> ・最低限の報告（報告、連絡、相談）ができるようになること。 ・場面かん黙の生徒のコミュニケーションにおける配慮について。
助言・まとめ	言葉でのコミュニケーションにこだわらず、本人なりにできる用法で取り組んでいくと良い。

事例16 高等部

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・要求や挨拶の言葉を自分から発することはあまりない。何度も促すとまねて言うが、発音がはっきりしない。 ・自分が好きな物の名前（エレベーターなど）は、自分からはっきりと言う。 ・ゲームの効果音や、気に入った音楽を口ずさむことがよくある。
----	---

課題・質問	<ul style="list-style-type: none"> ・嫌だろと思うられることに対しても、拒否の意思を示すことが少ない。 ・「欲しい・いない」「したい・したくない」などが分かりづらい。 ・選択肢の中から自分の希望を選ぶためにはどのようにすれば良いか。
助言・まとめ	<p>選択肢の中に、したいことや欲しい物がないのではないか。学校では、「やりたくなければなくていい。」ということではできにくいので選ぶことは難しいのかもしれない。エレベーターの表の取組（1週間乗らずに、乗れる金曜日を待つ）がうまくいっているので、未来に向けて見通しを持てる取組をしていくと良いのではないか。</p>

事例17 高等部

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活での会話はほぼ問題ないが、早口になったりきつ音になったりすることがあり、聞き取りにくいことがある。 ・会話の内容が飛び、何に関して話しているのか分かりにくいときがある。
課題・質問	<ul style="list-style-type: none"> ・現在、聞き取れないときはもう一度ゆっくり発音するよう促し、相手に伝えることの大切さを意識するよう言葉掛けをしている。 ・ゆっくり発音させるように促しても良いか。
助言・まとめ	<p>きつ音は、治らないと思ったほうが良い。本人が気にしていないのであればそのまま良いのではないか。</p> <p>ゆっくり発音させるのは、意識させてしまうためしないほうが良い。手法としては、メトロノームを使って一音ずつ話す練習を試みるのも良い。</p> <p>現在は会話を楽しむ様子が多く見られており、友人との間では伝わりやすい短い言葉を使ったり、お決まりのギャグを言い合ったりしている。</p>

事例18 高等部

実態	<p>作業学習で本生徒を担当している。教師に「報告・相談」をしたり、友達と作業内容の確認等をするときなど、やや緊張する場面できつ音がみられることが多い。しばらく見守ると言葉が出てくるため、急がずゆっくり待つ話を聞くようにしている。最初の一言が出ると比較的言葉は続くものの、早口で話すため、話の内容が聞き取れないことがある。</p> <p>生徒自身は、楽しそうにいつも自分からいろいろな人に話し掛けており、きつ音による心理的側面からの二次障がいには感じられないが、相手に内容が伝わらないこともあるため、話を途中でやめてしまうことがある。作業内容には影響はみられない。</p>
課題・質問	<p>「作業学習」など、班を編成して行う授業の際の生徒への支援や配慮事項（環境調整）について知りたい。</p>
助言・まとめ	<p>成人でも早口の人がいる。きつ音は、脳梗塞の後などに症状が出ることもある。ゆっくり発音させるのは、意識させてしまうためしないほうが良い。手法としては、メトロノームを使って、一音ずつ話す練習を試みるのも良い。</p> <p>班別学習をする際の配慮事項については、本人が気にしていないのなら特に考える必要はないと思う。</p>

事例19 高等部

<p>実態</p>	<p>教師の言葉はほぼ理解しており、指示に従ったり約束事を意識したりする。ふだんの生活の中で、教師の隙を見つけては、流しで石けんを付けて手洗いをする。止めると、余計に機会をうかがおうとする様子がある。冬場になっても関係なくするので、手荒れがひどくなり出血することもある。また、突然に平手で近くの者をたたいたり、出会い頭にさっと触ろうとしたりする。手洗いが少なくなると触る行為が増えるように感じている。家庭でも同様の行為があり困っている。また、家庭、学校関係なく、思い付くと突然走り出し交通事故に遭いそうになることも何度となくある。(予測がつきにくい。)</p>
<p>課題・質問</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・時期によって変わるこだわり行動(手洗い、手で人に触る、場合によっては突然手でたたく。)を少なくする。あるいは、他の迷惑を掛けない行動に代替できるか。 ・突発的な飛び出し(特に道路等)行動を少なくしていくには、どのような方法が考えられるか。
<p>助言・まとめ</p>	<p>こだわり行動を特性として捉える。危険を伴う場合は、薬の使用について相談してみても良いのではないか。</p>

事例20 高等部

<p>実態</p>	<p>自閉症。高等部の生活にも慣れ、自分の要求を言葉にしたり、言語の種類も増えてきたりしている。集団での活動や急な予定の変更もスムーズに動けることが多くなってきている。教師の言葉や表情を見て、自分の行動をコントロールすることもあるが、禁止や注意されても衝動で動いてしまうこともある。</p>
<p>課題・質問</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・体調の悪いときに「しんどい。」と言うようになってきたが、どこが悪いのか言えない。 ・教師に注意や禁止をされても、衝動的に行動することがある。(授業中の手洗い、農園のトマトや給食のつまみ食い、バスから道路への飛び出し) ・体調の悪いときに、どこが悪いのかを言えるようにするには、どのような指導をしたら良いのか。 ・禁止や注意されても、衝動的に行動してしまう。危ない行動について止める言葉掛けや方法はあるのか。
<p>助言・まとめ</p>	<p>体調の悪い(「しんどい。」と訴える)ときに身体部位の絵カードでどこが悪いのか、問い掛けてみる。</p> <p>こだわりの行動は止めることができないので、特性として捉える。自分でスケジュールを立てて行動するのは難しい。課題をやり続けられるようにしてあげると、落ち着いて作業などができる。</p> <p>危険を伴う衝動的な行動を止める方法については、薬の服用を将来的に考えてみても良いかもしれない。</p>

事例21 高等部

実態	<p>学校での生活は、特に問題なく、自分の仕事は責任を持って行う。また部活動も頑張っており、2学期からは別の部への入部も希望している。しかし、取り掛かり方が分からないときや不安があったときなどにはためらい、みんなから遅れてしまうことがある。また、コミュニケーションを取ることが苦手で、一度自分が決めてしまうと、なかなか変更ができにくく、応用ができにくい。</p>
課題・質問	<ul style="list-style-type: none"> ・決められたことに対しては、真面目に活動しているが、融通が利きにくい。また、コミュニケーションを取ることが苦手なため、自分の意見を強く言うことができない。 ・融通が利きにくい生徒に対して、どのような方法で対応したら良いのか。
助言・まとめ	<p>一つの個性、こういう人なのだと考えこちらの接し方を考えていくようにしてはどうだろうか。</p>

3 成果と課題

外部専門家を招いてのモデル授業研修では、療育で行っている課題と同じ内容や流れで授業を行っていただき、ふだんの療育の様子がよく分かった。また、モデル授業で行った課題について一つ一つねらいを説明していただき、分かりやすくより理解を深めることができた。

研修会では、児童生徒と日々接する中で感じている課題や支援方法についての疑問点や悩みなどについてアドバイスをいただくことができた。事例で挙げた児童生徒の中にも過去に療育に通っていた者、現在も通っている者が多くおり、より具体的にアドバイスをいただくことができた。このアドバイスを参考に、それぞれの課題に取り組んでいきたい。

小学部、中学部、高等部と学部の違う教員が集まって構成された班であり、学部ごとに抱えている悩みや疑問、課題や目標など様々な立場での話を聞くことができ、新しく気付かされることもあり学ぶことが多かった。しかし、他学部の児童生徒の実態について具体的な共通イメージを持つことが難しく、話し合いが深まりにくい傾向が見られた。更に研究を深めるためには、児童生徒の実態や課題に思っている場面などの様子を撮影したものを用いながら話し合いを行うなど共通イメージが持ちやすくなるような工夫、改善をしていく必要があると感じた。

ソーシャルトレーニングの基礎と具体的な指導・支援班

1 はじめに

本班は、小学部3名、中学部7名、高等部12名の計22名の教師で構成されている。対人関係や行動面が気になる児童生徒の事例を挙げ、より良い指導・支援について探ることとした。

2 実際の取組

気になる児童生徒の実態や課題を整理し、対応に関する質問をまとめた。7月26日に、「カウンセリングスペース パ・ザ・パ」臨床心理士の中島珠実先生をお迎えし、事前に伝えた児童生徒の実態・課題・質問に答えていただく形で講演をしていただいた。行動の背景にある児童生徒の気持ちの受け止め方や望ましい指導・支援について、中島先生が関わってこられた事例を含めた具体的な対応策を聞くことができ、問題解決のヒントになった。

研修後、中島先生の助言を参考に指導内容を検討し、2学期間実践した。以下の表はその実践記録である。

事例01 小学部

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・言語指示を理解し、行動する。 ・思い通りにならないと、泣いたり相手をたたいたり、教室を飛び出したりして感情を表現する。 ・大きな集団に入ると落ち着きがなくなり、「いや。」や「むり。」と泣き叫ぶことがある。 ・大きな声で抵抗感を示したあと、両手を差し伸べて抱っこを要求することが多い。抱っこされると落ち着く。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・適切な方法で、自分の要求を伝える。 ・落ち着いて集団活動に参加する。
質問	<ul style="list-style-type: none"> ・教室を飛び出そうとするとき、出る前に引き留めるか、気持ちが落ち着く場所まで行かせておいて、その後声を掛けるか。 ・連続して出て行こうとする場合には、先に引き留め、出てはいけないことを強めに指導している。走り出ても後ろを振り返ったりするので、追い掛けてほしい気持ちがあることが分かる。
助言	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校1年生の難しさ、新しい環境への適応の難しさがある。 ・思い通りにならないときの行動が、わがままによるものか、発達障害に起因するものなのかを見極める必要がある。 ・支援者は対象者の大きな声や泣き声に驚かず、まず観察をする。 ・興奮状態のときになだめて落ち着かせようとしても無理である。興奮したときには時間を置くこと。 ・教室を出て行くなど、タイムアウトの場所は必要である。 ・出て行かなくするには、予防策が大事である。
指導	<ul style="list-style-type: none"> ・興奮状態になったときは時間をおいて対応する。 ・活動の見通しを持たせる手立てを講じておく。 ・それでも出て行く場合は、危険性がないことを確認した上で見守る。

ま と め	<p>やりたいことを中止して行動の切り替えを求められるときに、大声、奇声を挙げて抵抗感を示すことが続いている。教室からの飛び出しはほとんどなくなった。</p> <p>興味・関心がいろいろなことに移りやすいので、予防策としての手立てはその時点での興味・関心事に寄せて考えておく必要がある。</p> <p>学級の他の児童が大声や奇声を嫌がって泣いているのを見ると声を抑えようとする場面があるので、他との関係性の中で自己抑制ができるようになることも期待している。</p>
-------------	--

事例02 小学部

実 態	<p>音楽やプールの授業が大好きでその時間を楽しみにしている。楽しめるものがあるときは、「その楽しみのために今は頑張ってる。」という指導をすると落ち着いて行動したり、我慢したりできる。しかし、楽しみがない日は、どこでも寝転んだり、大声を上げたり、周りに暴力的な行為をしたりしてしまう。楽しみがない日は一日の見通しを立てて説明することで安定を試みている。</p>
課 題	<p>楽しみなことがあっても不安定になっていた昨年に比べると、成長が見られる。楽しみがなくても情緒を安定させることが今後の課題である。しかし、今のままの指導では楽しみなことがなければ、落ち着いて行動したり、我慢したりすることができるようにならないと感じる。</p>
質 問	<p>楽しみがあるときは今の指導で適切であるか。楽しみがないときはどのような指導を行えば効果的であると考えられるか。</p>
助 言	<ul style="list-style-type: none"> ・好きなこと、褒美になることを見付けていることが素晴らしい。学校以外のもので子供が聞いただけで目を輝かせるようなものを見付けてあげるとよい。 ・トークンエコノミー法は続けていると効果が薄れてくるため行いすぎはよくないが、まだ低学年の児童であるため今の段階では今の指導で問題ないと考えられる。 ・楽しみがない日がないように楽しみを作る工夫が必要である。 ・パニックになってからの対応は難しいため予防と観察が大切である。パニックになってしまった場合は時間を置くか場を変えるしか手立てがない。
指 導	<ul style="list-style-type: none"> ・好きなことや褒美になることを増やしていく。 ・楽しみがない日がないように楽しみを作る工夫を行う。 ・予防と観察を大切に、パニックを起こさないようにする。
ま と め	<p>こまめに楽しみを作る工夫として、嫌ったり苦手を感じたりしている活動（着替えや掃除など）の後には好きなDVDを観るようにしたり、行きたい場所に行ったりするようにした。また、近々楽しみな行事がある時はそのことを伝えるようにした。この支援により我慢をすることや落ち着いて活動することは増えたように感じる。しかし、心から楽しみにしていることを早くから伝えすぎると、その楽しみなことがその瞬間にできない、行われないことに納得できず不安定になり、大声を上げたり、周りに対して暴力的な行為をしたりするなど怒りを露にすることがある。不安定になる回数は減ったが、不安定になったときの取り乱し方が大きくなっており、物に当たったり、一時期はほとんどなくなっていた他の児童をたたいたりするようになった。担任の教師にはかみ付くこともある。今後は更に落ち着いて楽しく学校生活を送れるように工夫と改善を繰り返し、本児のために支援していきたい。</p>

事例03 中学部

実態	今年度から本校中学部に入学している。大洲市からスクールバスで通学をしている。会話や指示も通り、身辺自立もしている。偏食があるが嫌いな献立が給食に出ても残さず食べる。しかし、突然大声を出したり隣の教師をたたいたりすることがある。食べ終わるまで、ずっと「こんな給食嫌い。」と言いつける。
課題	周囲が次の活動に取り組んでいても、「自分の時間がほしい。」と言って、すぐに課題に取り組むことができにくい。学級単位で集団行動する場合にも、みんなを待たすことが多い。待っていることを伝えたり、時程を細かく伝えたりしても行動は変わらないことが多い。ときには突然大声を出したり隣にいる教師をたたいたりすることもある。常に「〇〇嫌い。」ということが多く目立つ。
質問	自分がしたいことを優先する気持ちを我慢ができない場合の言葉掛けやスムーズに行動を促すような言葉掛けの方法があれば知りたい。
助言	食事の問題については、不登校の原因にもなることがあり、発達障がいの子は好き嫌いが強いのでよくある。食べる、食べさせない、残す、残さない、このやりとりは親との関係付けの手段であるので、食べられたことを褒めてあげながらやっていくしかない。我慢していることを称揚して「自分の時間がほしい。」と言うのなら休ませてあげる。そのことを受け入れてあげて、頑張ったときは休んでもいいことが伝わるようになれば落ち着いていくと思う。大声を出したり、たたいたりする行動に入っている時点で、止めるのは難しいので時間をおいてクールダウンをしてあげるのほうがいいのではないかな。 注意より褒めることのほうが効果的なので活用されてはどうか。
指導	<ul style="list-style-type: none"> ・頑張っていることが報われない状態が改善できるようにする。 ・休み時間には好きな音楽を聴いてダンスをする。 ・分からないことは、どんなささいなことでもいいので聞くよう、伝える。 ・疲れてどうしようもないときには「休ませてください。」と伝えるよう教える。 以上のことを実際に取り組んでみる。その場の状況に合わせ適宜言葉掛けを行い実践していく。
まとめ	現在の様子は、給食では好き嫌いもしなくなり、出された食事は完食している。疲れているので「自分の時間がほしい。」ということについては、2学期一度も言わなかった。分からないことを、とにかく教師に尋ね解決、もしくは理解をして行動に移すことが増えた。聞いたことで、つまずきが無くなり褒められることも増えた。笑顔が多くなり、休み時間には好きな歌のダンスをしたり、好きな教科の先生に会いに行ったりしている。このように、「好きなこと」が見付かり、毎日本人なりに頑張って何事にも意欲的に活動をしている。今後もこの状態を継続していけるよう指導実践していきたい。

事例04 中学部

実態	小学部から、本校に在籍していることもあり、基本的な学校生活は落ち着いて取り組めることが多い。排せつは、教員と一緒にトイレに行くが、処理については自分でする。便秘気味で、入所している施設で投薬によって排便しているが、スムーズに出ないこともある。便秘気味の時は、機嫌が悪くなることが多い。
課題	分や体調によって、スムーズに学習活動に参加することができないことがあり、嫌になると「おしっこに行こう。」と言って、トイレに行こうとすることがある。実際にトイレに行くと、排せつすることもあるが、個室に座ってしばらくの間、動かなくなることもある。

質問	気分によって、トイレに逃げ込んだり、トイレで気持ちを落ち着けたりするような様子があるので、トイレではなく、教室の中にある和室スペースで休んで、気持ちを切り替えられるようにしたい。
助言	<p>トイレがタイムアウトの場所になっている。</p> <p>理由としては、嫌なことから逃げられるということもあるだろうが、トイレに行くことで教員がついてきてくれる、独占できるという思いもあるのではないかと推察される。</p> <p>小学部から在籍しており、基本的な学校生活には落ち着いて取り組んでいるということで、教員の支援の手が少なくなってきたのではないかと推察される。そこで、関わりが減ってきて寂しい、もっとお世話してほしいという思いから、トイレに行くことで教員との1対1の時間を作っているのではないかと考えられる。</p> <p>教室の和室スペースをタイムアウトの場所にできないかということだが、教員を独占したいという気持ちがあるのなら、教室を出ないと意味がない。教室では、教員を独占できないからである。トイレに連れ出すことで、教員を独占できている。今後、時間は掛かると思われるが、トイレに座る回数は減っていくはずである。</p>
指導	<p>休み時間にトイレに誘うようにし、授業中のトイレに行く回数を減らせるようにする。誘うことでトイレは休み時間に行くという習慣を身に付けられるようにしていく。</p> <p>タイムアウトとしてトイレに行こうとする時は、排せつが終わったらトイレから出ることを確認させてから、トイレに行かせるようにする。</p> <p>トイレに行きたがるタイミングや前後の学習の流れなどを観察しながら、言葉掛けや切り替えの方法を探っていく。</p>
まとめ	<p>常に便秘ぎみで、便秘薬を服用し排便する習慣が付いていたが、夏休みから食事療法を開始したことで、自然排便の回数が少しずつ増え、それに伴いトイレに籠もる回数も減った。</p> <p>便秘が続き、便秘薬を服用した日は、便意を感じるためトイレに長く座ることもある。しかし、教員の終了を伝える言葉掛けでトイレから出るようになってきている。また、排尿については、体調や気温に左右されることもあるが、授業中に嫌なことから逃げる手段としてトイレに行くことは少なくなった。授業中にどうしても我慢ができずにトイレに行かせる時は、教員へ行き先を伝え、了解を得てから行くようにした。トイレから早く出ることを伝え、約束をしてからトイレに行かせるようにしている。そのことで、排尿が終わるとトイレから出て、スムーズに教室に戻るようになっていく。今後も継続して、取り組んでいきたい。</p>

事例05 中学部

実態	<p>中学部から本校に入学し、寄宿舎で生活をしているが、情緒が安定せず登校できなかつたり、遅刻したりする日が多い。登校できた日は、授業に意欲的に参加し、級友や友達とも仲良く過ごせている。排せつは自立しているが、幼少期の家庭での経験がトラウマとなり、大便是オムツにしている。また、排便はしているが、オムツを替えない。家庭では食事をとっているが、学校や寄宿舎では、食事を拒むことが多い。(年度初めに給食着の着用を嫌がり、食堂に行くことを拒み始めた。)</p>
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・排せつは自立しているが、大便是オムツの中にする。 ・食堂で給食が食べられない。 ・体を清潔に保とうとする意識が低い。 ・情緒が安定せず、寄宿舎から登校できないことがある。

質問	<p>上記の課題に対して、現在は個別での言葉掛けを行い、できる限り本人の意思を尊重するようにしている。入学当初に比べ情緒面での安定は見られるが、課題に対して教師が触れようとする、間接的な質問でも耳を傾けなくなり、口を閉ざしてしまう。肥満傾向にある生徒で健康面や衛生面等も気になっている。本人のできることやできないことを聞き取りながら指導や支援を進めていきたいと考えているが、今後の関わり方について教えていただきたい。</p>
助言	<ul style="list-style-type: none"> ・排便の失敗は傷付きを残しやすい。不衛生になっている。 ・臭いに対しては、気付いてないふり、聞いてないふりをしているのではないか。 ・食事に対して、家庭で食べられて学校では食べないことは、わがままとは言い切れない。 ・生育歴を考えると心がゆがんでいる。慎重に対策を練らないといけない一人である。 ・大人に対しての不信感がある場合は、時間が掛かることが多い。 ・考え過ぎているのではないか。不安が強い。 ・寄宿舎に入ったことで保護者に捨てられたという気持ちを持ったのかもしれない。保護者は子供より自分の生活に一生懸命になっている。 ・本人、保護者を褒める。 ・個別での言葉掛けを行い本人のできることできないことを聞き取りながら指導、支援を行っていく。 ・排せつについて定時排せつを目指す。本人と話を行い、排便排尿がなくてもトイレに行く時間を決めて行く。（固定時間を決める。給食の時間一人になる時間に行く。登校前舎で行う。2時間目遅れてきても認める。）汚れてなくてもはき替えるように。 ・行動観察を行う。アプローチしたときにどのような反応だったか。どのような対応だったらどういう反応だったか、記録を取る。
指導	<ul style="list-style-type: none"> ・見通しが立つ授業を行う。 ・学校、寄宿舎と話合いを持ち共通理解を図る。 ・保護者懇談では母親の話をよく聞き、褒める。
まとめ	<p>1学期に比べると欠席が減り、午後からでも登校できる日が増えてきた。登校できた日は友達との関わりを楽しみ、笑顔も多く見られた。給食は、偏食はあるが、教師が教室まで運ぶと食べるが多かった。排せつについては、給食中等、一人になれる時間を見ながら言葉掛けを行ったが、一度も行けていない。排せつや着替え等、課題となっていることについて話をすると、口を閉ざしてしまうため本人の意見を聞き出すことが困難であった。いくつかの選択肢を与えても、首を振り拒んでいた。夏休み中の家庭訪問では、家庭での排便やオムツをはき替えるタイミングを聞いた。入浴の際に風呂場でオムツを脱ぎ、入浴後にはき替えるということであった。教師が感じている以上に環境に左右されやすく、遅れて登校してきた際には教室に入れられないことも度々あった。食事や排せつについても、同様の要因が関係していると考えられる。今後も本人の様子を見ながら継続して支援していきたい。</p>

事例06 中学部

実態	<p>今年度小学校特別支援学級から本校中学部に入学した。話をするのは好きだが発音は不明瞭であり声が小さい。同じことを何回も繰り返し質問をする。登下校時の準備や、着替え等は指示待ちが多い。写真や絵カードを使用すると自ら動く事が少しずつでき始めた。友達や教師との関わりを好み優しい言葉掛けをすることもあがるが、相手に好まれない関わり方をすることが多い。小学校の時には一対一の関わりで学習することが多かったからか、現在も一対一で学習を行う時には落ち着いて行すが、他生徒3人ほどでの学習を行うときには、集中できなく注意を必要とする行動が多い。</p>
課題	<p>一日の流れを理解していると思われるのに、何度も同じ質問を繰り返してくる。友達や教師と関わるのが好きであるが、相手が好まない行動をとって関わりを持とうとする。注意をされているときにも初めは笑顔である。(笑いをこらえたり、途中から真剣になって話を聞いたりするようになる。)学習時においては、一対一の学習は落ち着いて行すが、他生徒と一緒にいるときには、好まない行動をとり、他生徒も落ち着かない状況になる。</p>
質問	<p>教師と一対一の関わりのおきに好ましくない行動をとった場合は、端的な言葉で注意をしたり、様子を見たりしている。良い行動をとったときには褒めるようにしているが、他生徒も一緒に授業中である場合、他生徒の影響がないように注意するにはどのようにすればよいか。</p> <p>写真や文字を使って一日の流れを伝えているが、何度も質問してくる場合はその都度答えればよいか。</p>
助言	<p>小学校での環境が違っている。中1ギャップも考えられる。不安やあがき、甘えがあるのではないか。一対一の関係が分散されることで不安を感じているのではないか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人を傷付けることや人に対しての嫌な行動に対しては、しつこく言う必要はないが必ず言う。言うべきことは必ず言う。 ・コミュニケーションの取り方はトレーニングが必要である。 ・他生徒と一緒にいる場面では注意しない。 ・繰り返し質問してくることにに対しては、その都度先生と話すことで落ち着いているのではないか。
指導	<ul style="list-style-type: none"> ・友達との関わり方を見守りながら、気になる言動が見られた場合は正しい言葉遣い手本を見せる。手本を真似て好ましいやり取りができた場合は賞賛をする。 ・人に対して嫌な行動をとった場合は、その場で注意する。 ・繰り返し質問してくる場合は言葉で応える。 ・周りに対して嫌な言葉を発した時には、その場の状況や本人の様子をよく観察し、発した言葉をそのまま受け止めず教師が変換をし、本人の様子を見守る。
まとめ	<p>正しい言葉遣い、行動の手本を見て真似ることで、友達との関係が良好になっている。発音が不明瞭な場面は、教師が間に入ることで、相手にわかりやすくなり、本人も伝わった喜びを得ている。発音については、本生徒が教師の口の動きを真似て言葉を発することが多くなった。</p> <p>学校生活にも慣れ質問は少なくなったものの質問してきたことに対しては必ず応じ不安を取るようになっている。</p> <p>学習においては、本生徒の好きな物を取り入れた教材を使うと他生徒と一緒に取り組む様子が見られた。また、自分から「したい。」という気持ちが芽生え、伝え</p>

	<p>てくるが多かった。</p> <p>完全に改善されたわけではないが、とても落ち着き、学習をしている姿が増えた。また友達との関わりにおいても笑顔で関わっている姿が増えた。信頼関係の構築、分かりやすい的確な支援に努めていきたい。</p>
--	--

事例07 中学部

実態	<p>気分の良し悪しで本校における過ごし方が変わってくる。気分が良いときにはたくさん色を使って絵を描いたり工作をしたりする。しかし、気分の悪いときには友達をたたいたり、トイレの大便器に座りこんでドアを蹴ったりすることが見られる。急に泣き出すことも多い。</p>
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・大便の排せつが見られなくても大便器に座りこむ。 ・友達をたたく。 ・顔をよく洗う。 ・情緒が安定せず、寄宿舍から登校できないことがある。 ・食べることが好きで肥満気味である。
質問	<p>上記の課題に対して、現在は担任と保護者が話し合っ解決に当たっているが、特に保護者も友達をたたくことは止めてほしいと考えているが、中々収まらない。気分を害しているときにどの様なことをすれば落ち着くか教えてほしい。</p>
助言	<ul style="list-style-type: none"> ・トイレに行く、顔を洗うは、立派なコーピングになっている。 ・気分を害してから収めるのは難しい。 ・友達とうまくいっているとき、手を出しているときの観察をする。 ・時間を置いたり、場面を変えたりすることが必要ではないか。 ・基本的には予防を心掛けることが大切である。 ・話を聞いてあげることも必要ではないか、怒ればよいものではない。
指導	<ul style="list-style-type: none"> ・トイレに行くことはコーピングになっていることから行かせないのではなく、状況を見て容認する。トイレで用を足すという本来の目的以外での使用ではあるが、自分で気持ちを落ち着かせようとするのは大切である。 ・トイレ以外でのコーピングが徐々にできるよう、畳の部屋などへ場所を変える配慮をする。 ・ふだんの様子をよく観察し、原因を探る。 ・気分を害する前に対処できるようにする。 ・友達に手を出した場合でもまずは頭ごなしに怒るのではなく、生徒の話をよく聞き、原因を探るとともに気持ちを受け止めるようにする。
まとめ	<p>トイレに行く時間をあらかじめ決めておき、確認するようにした。また、排せつがなくとも日に一度は大便器に座ることを許容した。気分を害したときは畳の部屋に入るよう促し、好きに行動させながら様子を観察した。気持ちが落ち着いてから生徒の話を聞き、原因を探ることに努めた。少しずつではあるがトイレへ行く頻度が減り、1日に3回ほどになった。気分の悪いときにトイレではなく、畳の部屋に場所を変えることにも慣れつつある。</p>

事例08 中学部

実態	自主的に行動することがほとんどなく、着替えや排せつ、移動の際に周囲の言葉掛けを聞いてから行動する。しかし、自分の中の決まりがあり、暑い中外に居続けても、決まった時間、決まった方法でしか水分補給をしない。
課題	言葉掛けがなくとも自主的に行動する。喉が渴いたら、どのような状態でも水分を要求できるようになる。
質問	水分補給の際に、かたくなに「いらぬ。」と主張する生徒には、どう接すれば良いのか。
助言	人前で食事や飲水することを嫌がる子供も多く、場面を変えて、一人にしても飲まないのかを試してみてもどうか。また、その子の中にルーティーンとして飲水の時間や方法が決まっているのなら、教師が干渉することが負担になってしまう。そのため、教師は「絶対に屋外では飲ませなくてはならない。」と考えるのではなく、一日の総量として十分な水分を摂取できれば良いという考え方に切り替えた方が良い。
指導	生徒の体調面を考慮するあまり、その子にとって負担になるような強引な水分補給の指導はしないようにする。また、教室で一人にしてみたり、今までとは異なった時間帯に水分補給を促す言葉掛けを行ったりする。定期的に言葉掛けを行い、飲水時を観察することで、どういった場面、どういった体調の時に嫌がらずに水分補給をするのかを見極め、一日の総量として適切な量の水分が摂取できるよう配慮する。
まとめ	一日の総量として適切な量の水分を摂取することに重きを置いて指導することにした。給食時に自分から水分を要求するようになったので、それ以外の時間に水分を取らせるような関わり方はしていない。一方で、教室でもジュースや果汁など味が付いたものなら「いらぬ。」と言いなながらも差し出すと進んで飲むことが分かった。また、暑い日に氷を口に入れる場面も見られた。今後も総量を重視した水分補給の指導をしつつ、夏場等に水分補給をさせたい場合、味の付いたものや氷等で補う方法も試みたい。

事例09 中学部

実態	てんかん発作と体調への配慮が必要である。まひはないが、動きにぎこちなさが見られる。また、けがにより前歯の接着が不安定で、転倒によりけがをしないように、教員が常に付いている必要がある。日常生活では、自分で着替えや食事を行い、練習により周りのペースに合わせるできるようになってきた。人との関わりには積極的であるが、その方法が適切でないため一方的になり、嫌がられる。
課題	人に挨拶や言葉掛けをするときに、「あ」「おい」とか「こら」と言い、適切な言葉を使わない。そのために、友達に嫌がられたり無視されたりして、自分の本意を伝えることができない。また、悪い態度をとるつもりはないのに、恥ずかしい気持ちや照れを隠すために、唾を吐いたり舌を出したりして、嫌がられる行為をすることで、人の気を引こうとする。
質問	自分の気持ちに合った適切な言葉を使ったり、態度をとったりするようにさせる方法はないか。せっかく優しい気持ちで関わろうとしているのに、それを伝えられないのは残念である。また、今後社会に出て、多くの人と関わる際の、良い習慣を身に付けさせる方法などを教えていただきたい。

助言	人の嫌がることを行う行為は、直すべきである。生徒の適切でない言葉を、その場でその都度、直していく方法が効果的である。しつこく言うのは駄目だが、必ず言うことが重要である。悪気のない場合の態度や言葉遣いの指導は、根比べである。「言葉遣いの粗さを、支援に当たっている教員が照れ隠しと認識していることが素晴らしい。」との指摘があり、子供の理解や支援に間違いがなかったことが分かり、うれしかった。
指導	助言により、改善する可能性があることが分かった。1学期は、いくら言葉を掛けても改善は難しいかもしれないとの諦めの気持ちもややあり、不適切な言葉を使った全ての場で、全ての時に注意をできてはいなかった。 助言いただいたように諦めずに、必ず言ったその場でその都度、しつこくならないようにさらっと、言葉を掛けるようにする。
まとめ	完全に改善されたわけではないが、生徒が適切でない言葉を言うたびに、できる限り注意する言葉を掛けた。ただし、「しつこくならないようにさらっと。」とはできないことも多かった。その結果、2学期末の現在、人の嫌がる行為が減ってきたように感じる。他に集中できることができ、手持ち無沙汰で人の気を引こうとする必要がなくなったこともあるかもしれない。生徒の行為を直接的に直す外に、他に興味を持っていく方法もあると、今回学んだ。またこの研修で、いつも支援に当たっている教員との信頼関係を構築することの大切さを、切実に感じた。

事例10 高等部普通科

実態	何を言われても、顔をにやつかせたままずと黙っている。たまに、二択のどちらかを指さしたり、発問に手を小さく挙げて答えたりはする。最近では、毎日言う言葉（「やってください。」など）が徐々に自分から言えるようになってきた。また、切羽詰まった状況（自分の物がなくなった、又は、汚れた）となると大きな声を出して訴えてくる。母親とはよくしゃべる。新しい環境や新しい人間関係に苦手意識があるようにも見えるが、嫌ではなさそう。給食を食べるのが周りに比べて非常に遅い。
課題	<ul style="list-style-type: none"> 何か言いたげな態度をするので、こちらから尋ねたり選択させたりするのだが、自分の要求をなかなか言わない。積極性がなく発言が少ない。 給食を時間内に食べられない。
質問	なかなか発言をしない生徒への接し方、または発言の引き出し方について。
助言	好きなことやテレビの話などから話し始める。また、どの場面で話をするかということも大切。教師との関係作りが大事になるので、その生徒のペースに合わせてコミュニケーションを取っていく。
指導	<ul style="list-style-type: none"> 何に興味があるのか、どんなことが好きなのかを探し、少しずつ会話に織り込んでいく。 無理に急がず、その生徒のペースでコミュニケーションを取っていく。
まとめ	積極性はまだ少ないが、徐々に発する言葉が増えてきた。昼休みにトイレに行くことが増えたため、自分の居場所を知らせるためか、「トイレに行ってきます。」という言葉は自分からはっきり言うようになった。じっとしているが、周りのことはよく見ているようで、友達の動きを把握している。また、突拍子もない行動を目撃したときには教えてくれる場面も増えてきた。 給食は相変わらず遅い。しかし、本人に確認を取り、教師がプレート上におかずを並べると、箸の動きが速まり完食する。デザートを残すこともない。時間の関係上

	<p>食べる量が少ないが、体重は増えているため、あまり心配せず本人のペースに合わせて見守っていこうと思う。</p> <p>笑顔を見せることも多くなってきたため、今後の変化に注目していきたい。</p>
--	---

事例11 高等部産業科

実態	人と関わることが好きであるが、やや周囲の状況に関係なく話し続けるところがある。こちらの気持ちや様子を伝えると、気付き、素直に行動を改める。また、やや早口で、聞き取りにくい。
課題	周囲の状況を判断して話を進めることがやや難しいときがある。相手が人と話をしていたり、書類を書いていたりにしても話しかけ、次々と話を進めていくところがある。少し待つよう言葉掛けをすると気付き、待つことができる。
質問	今は話し掛けてよいときかどうかをその都度伝えていこうとは思っているが、何か良いソーシャルスキルトレーニングはあるか。
助言	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆっくりと落ち着いて話せたとき、待てたときを逃さず褒める。 ・その都度「今は少し待って。」等、繰り返しアドバイスをしていく方が効果的。
指導	場面を逃さないよう本人の様子をよく見て、アドバイスや褒め言葉などその場にあった言葉掛けをしていきたい。
まとめ	人と関わることが好きで、自分の周りで起こったことや自分で頑張ったことを報告したい気持ちが強い。また、人が話している最中に話してしまうことも多く、その都度言葉掛けが必要であった。本人の自覚もあまりなく、個人面談を通して自分の課題について伝えた。面談と言葉掛けで徐々に気付きができてきたが、一生懸命になると周りが見えなくなることが多かった。指導に当たって、アドバイスが多く褒め言葉を掛けることができていなかったと反省している。

事例12 高等部産業科

実態	学校生活の中で着替えや移動などいろいろなことに時間が掛かる。経験不足ということも大きいですが、できないことが多い。周りにいる生徒が手伝おうと言葉を掛けても返事をしたり、反応したりすることが難しい。
課題	友達に分からないことを教えてもらうことができず、分からないことがあっても一人で考えていることが多い。また、何かをしてもらったときに「ありがとう。」を言うことができない。
質問	<ul style="list-style-type: none"> ・分からないことがあるときは、友達に教えてもらうように促しても（言葉掛けや見本を示すなど）難しい場合にどのような支援が有効的か。 ・お礼の言葉がなかなか言えない生徒に対して、どのように支援を行えばよいか。 ・友達に教えてもらうことや感謝の気持ちを伝えることが苦手な生徒の背景にはどのようなことが考えられるか。
助言	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のペースがあり、手を出されたくないこともある。 ・プライドが高い。 ・本人の自尊心を大切にする。 ・お礼に対しては、言い続けるが、サラッと伝えるようにする。

指導	<ul style="list-style-type: none"> ・集団行動では、なかなか一人一人のペースに合わせる事が、難しいが本人のペースなども考えて活動をするようにしていきたい。 ・お礼に対しては本人だけでなく、学級全体でお礼などを伝え合うことができる雰囲気作りをしていきたいと思う。お礼を言うことだけにこだわるのではなく、本人の気持ちや言動などの背景も考えていきたい。 ・まずは、本人と周りの生徒との関係作りから始めようと思う。
まとめ	<p>行動は相変わらず、ゆっくりで、着替えにも時間が掛かる。着替えのときには、時間を測るようにし、5分以内に着替えることを目標にして取り組んでいる。</p> <p>お礼が言えるときと言えないときがある。自分から積極的に周りに関わることはないが、周りの言葉掛けなどには少しずつではあるが、返事を返す様子が見られるようになった。</p>

事例13 高等部産業科

実態	<p>時間にルーズな面があり、宿題を提出しないことが多い。授業を含め、人が話をしていると、話が終わらないうちに、自分の思い付いたことを口に出す。友達の気持ちを考えない言動が多く、クラスの雰囲気を壊すことがある。</p>
課題	<p>話をしっかり聞いて、自分の思いを伝えるようになること。自分の言動がどのように、人に受け止められるか考えようとしなさい。</p>
質問	<p>自分の言動が、友達を不愉快にさせたり、場の雰囲気を壊したりするようなことがあって注意しても同じことを繰り返します。このような生徒に対しての適切な言葉掛けはどのようにしたらいいのか。</p>
助言	<ul style="list-style-type: none"> ・本生徒は、典型的なADHDのタイプの生徒に多い実態である。 ・注意しても繰り返すものだという認識が必要。 ・年齢や経験に関係なく優先順位や待つことができないのは変わらない事が多い。
指導	<p>必要な言葉掛けをこれからも続けていくが、ADHDの特性を認識し、生徒の変化を急がずに、しつこくならないように支援していく。</p>
まとめ	<p>朝掃除への参加を勧め、参加するようになって登校時間が早くなり、授業間の移動も遅れる事が少なくなった。思い付きで言葉を発することはあるが、友達の気持ちや、場の雰囲気に適切であったかを、指摘すると徐々に、以前よりは雰囲気を壊すような言動は減ってきたように思う。今後もその都度、その場その場での言葉掛けを続けていきたい。</p>

事例14 高等部普通科

実態	<p>学校では特に問題なく、率先して他の生徒の手伝いを行ったり、部活動を頑張っている。ふだんの生活では感じないが、学習等で指示した内容が伝わらないと感じることが多い。問題となる行動は、家庭では、イライラしたり、疲れたりしたときに、一人になると、家族のものをどこかに隠したり、捨てたりしてしまう。家族からもきつく注意を受け、懇談会等でも本人も交えて話をしているが、なかなか直らない。本人も悪いと自覚しているが、やめられない。</p>
課題	<p>家族のものを隠したり、捨てたりせず、別の方法で、自分のストレス解消法を見付ける。</p>
質問	<p>本人も悪いと分かっているが、その行為を止められない。どのような方法で、そうした行為を本人が意識してやめることができるのか。周囲は、どのような支援ができるか。</p>

助言	<ul style="list-style-type: none"> ・学校でのストレスか、家庭でのストレスか、ストレスの原因を探る。母親や兄弟にいつもストレスの掛かることを言われている可能性はないか。そうした場合、ターゲットを決めて、わざとそのターゲットが困ることをしていることがある。 ・ストレスの原因となるものについて、教師がゆっくりと時間をとって聞く。 ・クレプトマニア（窃盗症）も考えられるが、この事例でいくと、そこまでではないのではないかと思われる。
指導	<ul style="list-style-type: none"> ・夏休み中、部活に来ている際に、本人に学校や家庭での様子をゆっくりと聞く。 ・懇談会等の母親の話からは、本人がいろいろと頑張っていることを褒めている様子はないので、家庭でのストレスもあるのではないかと考えられる。本人との話合いをもとに、母親にも様子を伝え、学校でも本人の頑張りを認め、できるだけ多くの賞賛を行いながら、家庭と連携して指導に当たりたい。
まとめ	<p>夏休み中に本人と話ができなかったが、家庭訪問を行った際に、家庭環境の確認を行った。様々な家庭事情を聞いたり、本人が自宅にある自分の物をすべて祖父宅に持って行ったりしていることなど、これまで把握していなかったことを知ることができた。母親に、部別研修で伺った内容を伝えると「なんとなく、分かります。」と言われた。2学期に入り、連絡帳等で母親に本人の頑張りをできるだけ多く伝えるように努めた。また、定期的に本人と母親に家庭での様子を聞くと、本人は「あまりしなくなった。」、母親は「相変わらず。」と言うことだった。11月に入り、家庭で犬を飼うようになると、本人は「そんなことをする間がないというか、気にならなくなりました。」とのことだった。しかし、母親に聞くと、相変わらずだと言われた。よくよく聞くと、物を捨てることはなくなり、置いている物が整理されていて、どこに何があるか分からないとのことだった。母親と本人の認識のずれの修正も必要かと思われる。</p>

事例15 高等部普通科

実態	<p>基本的な生活習慣は身に付いている。話も上手で教師とも対等に話ができる。家庭ではあまり構ってもらえないようで、それが学校での態度にも出ていると感じる。</p>
課題	<p>構ってもらいたい、関わりを持ちたいという気持ちから、絶えずいろんな方向へしゃべり掛ける。生徒であろうが教師であろうが、お構いなくしゃべり掛ける。授業中でも、教師が前で説明しているのが、自分の知っている話題が出ると口を挟んで注意を受けることも多い。何も考えず、ずっとしゃべっているのが、人がカチンと来るような発言も多い。また、足の不自由な生徒の足元を足で引っ掛けるようなしぐさをし、「ごめんなさい。」と教師に聞こえるような言動もある。</p>
質問	<p>これまで、いろいろな教師が指導してきたが、あまり改善が見られない。こういった生徒に対して、余計なことを言ったり、人を傷付けたりすることを言った場合は、その場できっちりと指導することが基本であると考えているが、適切な方法を知りたい。</p>
助言	<ul style="list-style-type: none"> ・ADHDの場合、繰り返し同じことをして注意を受けることが多い。それでも必要な注意はするべき。 ・注意の数以上に褒めてあげることを増やすことで自信を付けさせてあげることが大事である。 ・わざと嫌がらせをするときは、無視（何も反応しない）を試してみてもどうか。
指導	<p>自分の中で、指導してすぐの変化を期待し過ぎていたように思う。今後は、生徒の障がいを理解し、根気強く、「いいものはいい。」「駄目なものは駄目。」をその都度指導していきたい。</p>

まとめ	<p>生徒の特性も理解しながらも、余計なことを言ったり、人を不快にさせる発言があったりしたときは、その都度注意を行った。注意に対し納得がいかないときには、いらいらして体をかきむしったり、物に当たったりする行動も見られた。そういったときは、場所を変えたり、口調を変えたりし、諭すように話をすることで落ち着いて考える姿が見られた。これまでの指導で、こちらが期待するほどの改善は見られないが、効果を期待し過ぎず、根気強く指導を続けていくことが大切であると感じた。</p>
-----	--

事例16 高等部普通科

実態	<p>中学校3年の5月から不登校だった生徒で、指先が不器用で宿題の折鶴作りが負担だったようだと言っていた。高等部1年では「人に会いたくない。」という理由から週に1度の放課後登校を行い、学年末には終わりの会に参加してクラスメイトと挨拶をするようになった。1～2時間の調理実習にも参加した。その頃、自分から臭いにおいがすると母親に相談して受診すると「副鼻腔炎」であることが分かった。臭いの理由が分かって薬で症状が緩和されたこともあり、自分の中の課題が解決されたと話し、2年生になって毎日登校するようになった。中学校当時、おならに関することでいじめられ、人が信用できなくなったとつらい経験を話した。中学校時代から考えると、かなりの成長を感じている。</p>
課題	<p>「家族とクラス以外はどうでもいい。」と話し、裏を返すと、少しずつ関わる人が増え安心できる存在も増えてきた。臭いに関しては敏感で、医者から「思春期過敏症」であると言われている。スクールバス生だが、直接自分に言われたことでない臭いに関する話題に不快感を示し、現在利用できていない。「大勢の人の中にいるのは嫌い。」とも話している。本人のつらい気持ちを受け止める一方で、自分が気付いていない周りの気持ち等を伝え、本人の「嫌だ。」「つらい。」範囲や程度が和らぐよう努めているが、行動に結び付くには時間や経験が足りないように感じる。登校時の送迎に関しては保護者の負担も大きく、保護者の体調不良で送迎ができず欠席の日もあった。</p>
質問	<p>自分に自信が付くことで過敏な感覚が解消されるのだろうか。思春期過敏症に関する事例があったら伺いたい。</p>
助言	<ul style="list-style-type: none"> ・不安障害の中に身体醜形恐怖症があり、自臭症を併発している場合も多い。 ・自分のボディイメージが崩れている場合が多いので、違うと言われても受け取れないことが多い。自分のことを分かってもらえていないと受け取り、敵とみなされる。 ・繰り返し「私は感じないけど。」と言うがそれで自信を取り戻せているとは思えないし、正直難しい。臭いに関わるのではなく、別の部分で自信を付ける。
指導	<ul style="list-style-type: none"> ・臭いに関しては、本人が自分で取り組めるうがいを引き続き取り入れ、気持ちの安定を図る。 ・スクールバス利用については、保護者と相談し、本人・保護者の負担のない範囲で保護者送迎に切り替える。保護者の体調等を考慮し、いざというときに利用できるよう公共交通機関の利用練習を検討する。 ・クラスの中で役割を用意し、人と関わりながら活動する場面を設け、達成感を味わえるよう支援する。
	<ul style="list-style-type: none"> ・スクールバスの利用については、本人が穏やかな気持ちで学校生活を送ることに重点を置き、利用を勧めることはしないと話し合った。保護者の可能な範囲で送迎していただくことになった。

まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・1年次には取り組めなかった学校での授業、宿泊研修や校外学習等にも参加し、「学校は楽しい。」と話すようになった。しかし、11月中旬の文化祭後の片付け時、自分の異臭を感じた瞬間にふだん面識のない教師と目が合い「キレられた。」と感じたと話した。その教師から何かを言われた訳ではなかった。自分が異臭を気にしている分、相手も気にしたのではないかと受け止めてしまったと思われる。登校することを渋るようになったが、週に1度プリントを取りに放課後登校した。級友に対して「気持ちが落ち着いたら登校します。」と動画メッセージを残し、人との関わりを持とうとする気持ちをまだ持っている。調理実習等の本人が好む活動に誘い、人や活動に対して安心感を持てるよう、時間を掛けて関わっていききたい。
-----	---

事例17 高等部普通科

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・真面目で几帳面な性格 ・予定の変更に弱い ・友達を許したり、気にしたりする優しさはある。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・受け答えが場に合わない。 ・話し方が、相手に対して偉そうになったり、丁寧過ぎたりする。
質問	<ul style="list-style-type: none"> ・受け答えの練習にはどのようなものがあるか。
助言	<ul style="list-style-type: none"> ・アスペルガー障害の生徒には、その場にそぐわない話し方や丁寧過ぎる言葉遣いなどがよく見られる。 ・失礼に当たる言葉遣いはその都度注意できるが、丁寧過ぎるのは難しい。 ・本人が自分の個性として受け入れるような支援を心掛ける。
指導	<ul style="list-style-type: none"> ・相手が嫌な思いをするような言葉遣いは、流さず、その都度注意をする。注意が重くなり過ぎないようにする。 ・場に合わない発言を、周囲が嫌な思いをしなければ、注意ではなく、軽く指摘する。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・欠席者の欠席理由が体調不良の時にも、「休んではいけません。」と発言するようなことがあったが、「体調不良なので仕方がないね。早く良くなってほしいね。」と話すと、「早く良くなってほしいです。」と言い直すことがあった。 ・本人に悪気はなく、相手の言葉の意味を理解しにくいことからきていると考えられるので、その都度、今の状況に対してどう発言すればよいか伝えていく必要がある。 ・周囲と関わりたい気持ちが強く、相手の言葉によく反応して発言するが、状況に合わない発言が多い。周囲に本人の特性を知ってもらい、ある程度理解してもらうことも必要だと感じる。

事例18 高等部普通科

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・自閉症で多動。 ・温和で、争いを好まない。 ・生活、学習面にわたって決まった手順を好み、几帳面な傾向がある。 ・興味・関心のあるものに突発的に向かって行くことがある。 <p>理解言語が増え、日常的な場面では、指示だけで動作を行うことが多い。簡単な要求を伝える表出言語も増えているが、使い方が正しくないことがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・エレベーター、エスカレーター、散髪屋の看板（回転式のディスプレイ）が大好き。 ・視覚的に見て構造を理解するのが得意である。
課題	<p>実態にある「興味・関心のあるものに突発的に向かって行くことがある。」を心配している。例として、校内に設置されているエレベーターを勝手に操作して乗ろうとする。また、校外学習では、エスカレーターの停止ボタンを見付け、教師の静止も間に合わないスピードで停止ボタンを押したこともあった。幸い大きな事故や怪我等に結び付かなかったが、今後の校外での学習や修学旅行等に不安を感じている。</p>
質問	<p>校内のエレベーターの指導については、毎週、月曜日から金曜日までルールを守らせるため、勝手な行動をしなければ、毎日下校時に頑張ったシールを貼って行き、金曜日の下校時にプレゼントとしてエレベーターに1回乗せてもらえるといった指導を行っている。この方法は、正しいのか。今後、どのような指導や支援が適切なのか教えていただきたい。</p>
助言	<ul style="list-style-type: none"> ・トークンが利用できるのであれば一つの良い方法。 ・発達障がいの特徴を生かす指導を心掛ける必要がある。 ・治らない部分を目標や課題に挙げると苦痛にしかならないこともある。
指導	<p>上記の助言内容を生かし、現在の指導が本人にとって、精神的な負担とならないように十分に配慮しながら指導を継続して行きたい。</p>
まとめ	<p>何が本人を落ち着かせたのか原因は不明だが、2学期以降、エレベーターやスイッチ等への興味において、衝動的な行動がほとんど見られなくなった。そのため、修学旅行や校外学習などの活動に集団の一員として参加することができた。今後はこの状態が継続できるように、十分考慮した指導や支援を行って行きたい。</p>

事例19 高等部普通科

実態	<p>話すことに苦手意識があり、教師や友達との平易な会話はできるが、声が小さく、聞き取りにくいことがある。また、挨拶や返事を自分から行うことが少ない。</p> <p>騒がしい雰囲気や突然の大きな音が苦手で、そのような状況になると自分の世界に入り、活動が止まることが多い。（1年次の途中より、イヤマフを使用している）また、気分の波が大きい。</p> <p>友達が困っていると助けようとする行動が見られるなど、穏やかで優しい性格である。</p>
----	--

課題	人見知りで、話すことにも苦手意識があるため、自らコミュニケーションを取ることができない。 気分の波が大きく、気分により活動量に大きな違いがあったり、自分の世界に入り、活動が止まったりことがある。
質問	卒業後の進路先に介護職を希望しているため、本人も他者と適切なコミュニケーションを取る力の必要性を感じている（大きな声で挨拶や返事をする、いろいろな人と話をするなど）が、現状ではできていない。本人も望んでいるが難しい状況である。どのように支援をしていけば本人の願いを達成することができるか。
助言	<ul style="list-style-type: none"> ・進路は、発達障害の生徒がぶつかる大きな壁であり、自分の理想と現状が合っていないことが多い。その際、本人の本気度により、支援を考えていく必要がある。 ・現状、介護職は難しいのではないか。 ・自分の性格や特徴と向き合う良い機会になる。 ・目標が現状と離れている場合は、モチベーションがあるので指導が入りやすい。
指導	<ul style="list-style-type: none"> ・発表等、人前で話す機会を多く設けたり、いろいろな生徒、教師と関わる場面を設定したりする。 ・スモールステップの目標を設定する。（声の大きさなど）
まとめ	話すことへの苦手意識が軽減できるように本人が好きで得意なことを話題にしていろいろな人と関わる場を設定したり、何事にも受け身な姿勢である生徒に自発的行動を促すため、良い所を認めて褒めることを繰り返して行ったりした。自分の好きなこと、得意なことを話すということもあり、大きな声で生き生きと話している様子が見られた。また、認められ褒められる中で、生徒の中で自信が生まれてきたのか「これをやってくれる人。」などの教師の問いに対して、自ら挙手をして取り組む姿が徐々に見られるようになるなど、自発的行動が見られるようになってきた。

事例20 高等部産業科

実態	誰に対しても優しく接する。役割を与えると張り切って行こうとするが、あたふたと慌てふためいて行動するため、他の生徒が迷惑がる場面が多い。友達から問題点を指摘されると行動が消極的になり、自信をなくしてしまう。友達から力関係で下に見られてしまうことが多くトラブルの原因になっている。問題が生じるとよくよく考え、誰にでも相談を持ち掛け、話を聞いてもらうことで気分転換を図っている場面が見られる。体力もなく、実習において調子が悪くなると我慢して続けるのではなく早退してしまった。整理整頓が苦手で、机、ロッカーの中が乱雑になり、プリントもファイルにきちんと綴じることが難しい。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・物事をじっくり考えて行動する力を身に付ける。 ・問題が生じて自分力で解決する力を身に付ける。 ・身の回りの整理整頓をきちんと行う。 ・家庭に指導力がなく、本人の問題解決に向けて適切なアドバイスが期待できない場合、担任としてどこまで関わらなければならないか。
質問	・友達とのメールのやりとりや人間関係で問題が生じたとき、自分で解決する力を身に付けるにはどうすれば良いか。

助言	<ul style="list-style-type: none"> ・役割をもらって張り切れるところは素晴らしい。 ・人に相談するというのは自己解決力が付いているということ。 ・子供同士の場合はうるさがることもあるが、教師の対応としてはうるさがらないこと。
指導	<ul style="list-style-type: none"> ・メールや人間関係などでの問題解決は難しいかもしれない。 ・本人が達成できる役割を与えることで、自信を持たせるとともに、友達からも信頼される関係を作っていきたい。 ・人に相談するということを否定的に見てしまっていた。本人の悩みにじっくり乗ってやることの必要性を感じた。 ・本人と友達の関係に問題が生じた場合は、間に入り緩衝的役割を果たすよう心掛けたい。 ・メールの扱い方やマナーを学習する場面を多く作っていきたい。
まとめ	<p>夏休み中に、今年度仲良くなった後輩の女子生徒との関係が悪くなってしまったため、気持ちが落ち込んでしまった。友達に自分の気持ちを共感してもらいたくてメールをしまくり、さらに「死にたい。」などと何度も書き込んだようである。友達是对応できなくなり、メールを返せなくなってしまい、結果無視する形になってしまったことで、本人と友達との関係が悪くなってしまった。このことを取り上げ、メールの扱い方やマナーを考えさせた。</p> <p>2学期、福祉事業所で現場実習を行った。本人ができる仕事が多く、職員から褒められたり、頼りにされたりしたことが自信になり、卒業後の進路先へとつながった。自信を付けさせることがいかに大事か痛感させられた。</p> <p>クラスや科での力関係では下に見られてしまっているため、本人のちょっとした失敗や問題を友達から指摘されたり、からかわれたりすることが多い。その度に顔つきに表れたり、独り言が多くなったりして盛んに教師にアピールしている。自分で解決するよう促したり、突き放したりするのではなく、丁寧に言葉掛けを行い、話を聞くことで、落ち着いた様子を見せたり、くよくよ考える期間が短くなったように思われる。</p>

事例21 高等部産業科

実態	<p>不安障害と診断されている。苦手な人や家族との関わりの中で衝動的に暴力的な発言や自傷行為が見られることがある。昨年度末から、月に一度のペースで受診をするようになり、服薬も開始した。以前に比べるとパニックも少なくなっている。学校でパニックを起こすと、足をバタバタさせながら寝転がったり、腕を引っかきそうになったりする。落ち着いている時には、指示もよく理解し、作業もスムーズにこなす。</p> <p>卒業後は、一般の事業所への就労を目指している。</p>
課題	<p>苦手なことに極度の不安を感じたり、苦手な人の発言や行動に対して異常に反応したりする。その際に、パニックを起こしてしまうなど、感情のコントロールが難しい。</p>
質問	<ul style="list-style-type: none"> ・パニックを起こしている時の言葉の掛け方が知りたい。落ち着くまでは手を握ったり、深呼吸をしたりするように促しているが、どのタイミングでどのような言葉を掛けるのが効果的なのか。
	<ul style="list-style-type: none"> ・働く生活を考え、苦手な人との関わり方を少しでも身に付けさせたい。学校でできる取り組みとして、どのようなことが考えられるか知りたい。

助言	<ul style="list-style-type: none"> ・パニックを起こしてからへの対応は難しい。時間をおく、その場面、場所から離れさせる。好きなことに関する話をして、話題を変える。 ・パニックを起こしそうな場面を回避する対策を一緒に考える。 ・不安障害を抱えたままの新しい環境での仕事というのは大変難しい。具体的な場面設定をしてSSTなどを活用すると良い。人との関わりはどの分野でも苦勞する。ジョブコーチなどを利用し、支援していくことが必要である。 ・うまくいっていることを続け、その場面をよく観察する。 ・なぜ、一般就労を目指しているのか話し合う機会を持ち、今の自分に足りないことは何かを考えさせる。
指導	<ul style="list-style-type: none"> ・本人が不安を感じるかもしれない活動に関して、どのように対応していくかを事前に話し合う。 ・不安そうな表情や態度が見られたときには、本人の興味のある話を持ち掛け、気分を変える。 ・卒業後の生活について、話し合う時間を定期的に設ける。
まとめ	<p>夏休み中の一般事業所での個人実習、後期個人実習ともに対人関係でトラブルを起こした。その後、それらの実習を振り返りながら進路についての話を定期的に行った。また、医師からのアドバイスもあり、卒業後は福祉就労を経て、一般就労を目指していくことになった。進路の方向性が決まり、落ち着いて生活できる時間が増えるのではないかと思っていたが、苦手なクラスメイトが教室に入ってくると過剰に反応し、パニックを起こすことが続いた。</p> <p>学校生活において、苦手な友人との関わりを完全に絶つことはできないというような話をしながら、どのように対応していくかを事前に話し合った。修学旅行もあったため、バスの席やグループ行動において、できるだけ関わりが少なくなるように配慮した。そうすることで、落ち着いて過ごすことができた。また、パニックが起きる前には表情が険しくなるため、その段階で言葉を掛けることを心掛けた。間に合わず、パニックを起こしてしまうこともあったが、比較的短い時間でクールダウンすることができた。わがままで行動をしているように思えるときもあり、自分で解決するよう促すこともあったが、パニックの様子を見ていると、早めの支援が必要であることを痛感した。</p>

ICT活用・AT活用班

1 はじめに

本校のすべての普通教室には6月に最新OSのノートパソコンが配置された。各学部による使用状況は様々だが、学部が上がるにつれ、生徒の使用率も高くなり、高等部になると生徒が積極的に使用することも多い。また、平成25年度に導入された10台のタブレット端末をはじめ、スマートフォンやタブレット端末の急速な普及によりICT機器がより身近なものとなった。今回は、先の研究紀要から2年たった本校でのICT・ATを活用した授業の実践を報告する。

2 各部の実態

小学部には、32名の児童が在籍しており、障がいの実態は様々である。タブレット端末等を用いた指導を継続してきたことで、児童のICT機器への興味・関心は強い。休み時間にタブレット端末で映像教材を見たり、タッチゲームアプリで遊んだりしてタップやスワイプといった基本の操作を学習している児童がいる。個別の学習の際には、タブレット端末を用いて、平仮名練習アプリで書き順を確認したり、かるた取りのゲームをしたりして、文字の学習をしている児童もいる。学部全体の指導の際にも、ICT機器の使い方の指導や視覚教材を使っての行事の説明を行った。動物園への遠足の際に動物の写真コンテストを行った。児童たちが動物の写真を撮るときに、タブレット端末の写真アプリを使用することで、大きな画面に動物が入っていることを確認しながら撮ることができた。クリスマス集会に向けて、「サンタクロースからの手紙」としてDVD教材を作成した。サンタクロースからのメッセージを聞いて、集会の内容を理解したり、教師がサンタクロースに変装して踊った「あわてんぼうのサンタクロース」のダンス教材を見てダンスの練習をしたりした。また、タブレット端末の使用を通して、順番を待ったり、優しく物を扱ったりするなどのルールを共に学んでいる。

中学部には44名の生徒が在籍しており、その障がいの程度は様々である。しかし、どの生徒もタブレット端末やスマートフォン、パソコンに対しての興味・関心は非常に高い。タブレット端末の操作についても、家庭で使用している生徒以外もタップやスワイプ等の基本的な操作を覚えて休み時間等に友達とゲームをしたり、画像や動画を見たりして楽しむ場面が多く見られる。

授業で活用する際はゲームアプリを活用して言葉の学習を行うことで、平仮名や片仮名、漢字を覚えたり、身の回りの物の名称を覚えたりしている。生徒一人一人の興味・関心のある物を活用して学習ができるので、生徒たちも意欲的に学習している。また、中学部全体の指導の際もタブレット端末を活用して指導することにより、集中して話を聞く生徒が増えて来ているように思える。調べ学習の際には、タブレット端末を使って調べたり、図鑑等で調べた物を写真で撮って後で確認したりするなど、カメラ機能を活用して学習に取り組むことも多かった。

高等部には、普通科60名、産業科46、合計106名の生徒が在籍している。普通科では、自分専用の携帯電話・スマートフォン・タブレット端末等を持っている生徒が28%、使いたいときに家族のそれらを活用する生徒が38%、全くそれらを使用しない生徒は40%となっている。産業科ではそれぞれ75%、9%、16%となっている。産業科では、4人に3人が自分専用のコミュニケーションツールを持っており、約5人に4人がコミュニケーションツールを活用することができている。この数値は一般の高校となんら変わりはない。そのため授業においてタブレット端末等を使用した場合でも、ほと

多くの生徒はスムーズに活用している。普通科の生徒も中学部から授業等でタブレット端末等を活用してきたこともあり、上手に扱える生徒も多い。

授業での活用で多いのは他学年同様プレゼンテーションアプリである。行事の事前指導の際に用いることが多い。また、事後指導の際には写真やビデオを用い、振り返り学習を行っている。普通科で発語のない生徒に対しては、タブレット端末をコミュニケーションツールとして使用することもある。教科ではインターネットの画像や動画等を利用したりして資料集として使用している教師が多い。次の実践事例にはあげていない活用例としては次のようなものがある。作業の様子をiMovieで制作して文化祭で流した。文化祭で作業動画を見ることをとても楽しみにしている生徒もあり、自分の映像が流れた際には喜んでとてもよく見ていた。時間内に作業を終えたいときや、取りかかりをスムーズにしたいときなどはスマートフォンのタイマーを用いて、視覚的に時間が分かるように示した。余暇での利用として「絵本スタジオ」や「パズル」のアプリを活用している。

訪問教育には、在宅2名、入所2名、計4名の児童生徒が在籍している。訪問教育の児童生徒は障がいの程度が重く、座位をとる機会が少ないため、日常生活でタブレット端末を使用する機会は少ない。また、四肢にまひがあったり緊張が強かったりして微細な動きをしにくく、タブレット端末をそのまま操作することが難しい。側わんの進行により、姿勢保持に困難を抱えている場合もある。授業では、タブレット端末で絵本アプリを見たり音楽を聞いたりすることが多い。画面に触れると映像が変化したり音が鳴ったりするのを見て、笑顔を見せることがある。タブレット端末を使用することは、自分が行動する（画面に触れる）ことで何らかの変化が起きるという因果関係の理解を促し、学習活動に主体的に取り組もうとする意欲を喚起している。実際の楽器を鳴らすと発作が多く起きる児童生徒が、代替的に楽器アプリを用いると発作が少なかった、という場面もあり、タブレット端末は訪問教育の児童生徒にとって活動の範囲を広げるものとなっている。また、訪問教育は教師と児童生徒が一对一で授業を行っており、集団での活動の機会がごく限られる。しかし、タブレット端末のカメラや通信機能を利用することで距離の離れた本校のクラスとの交流が可能になり、人間関係の形成やコミュニケーション能力の向上にも役立っている。

3 授業での実践例

(1) カメラアプリを使った表情理解への取組（小学部）

ア 対象児童の実態

本学級は、小学部2年生の児童5名で、障がいの実態は様々である。家庭や学校でスマートフォンやタブレット端末を利用して過ごしている児童が多い。家庭での使用内容としては、インターネット検索や動画の視聴、ゲームアプリを使って余暇を過ごすことが多い。学校では、平仮名の書き順の確認や視覚教材の視聴を通して学習している。日常生活の中で表情の表出や理解に困難さを示す児童がいる。

イ 活動の目的及び具体的内容

【目的】技術、技能面では、タブレット端末の基本機能である、写真アプリの使用方法について理解する。認知面では、自分の表情について興味を持ったり、表出したりする。



図1
画像編集アプリを使用し
サンタクロースに変身した教師

【内容】授業の導入として、「かおかおどんなかお」という絵本とプレゼンテーションアプリを用いて、電子絵本にして読み聞かせを行い、怒った顔や泣いた顔などいろいろな表情があるということを見聞かせた。次に、教師がタブレット端末のカメラアプリのセルフ撮影モードと大型テレビを使って、いろいろな表情の手本をテレビに映して見せた。最後に、「笑顔」の写真を撮ろうと提案し、タブレット端末のセルフ撮影モードで自分の表情を確認しながら、笑顔の表情になったときに児童が自ら写真を撮るようにした。

ウ 取組の成果

タブレット端末の画面に自分の顔が映っていることを確認し、いろいろな表情をしてみた児童やテレビに大きく映る自分を見て喜んだ児童がいた。それぞれ、自分の表情を確認でき興味を持ってタブレット端末を操作していた。楽しく興味のある内容だったため、自然と表情が良くなり、全員笑顔の写真を撮ることができた。撮った笑顔の写真を全員で見合い、友達の笑顔の表情も確認した。自分の笑顔を確認するという目的は全員達成することができた。カメラアプリの操作については、シャッターボタンの使い方を習得しきれなかった児童がおり、今後も基本機能であるカメラアプリの使用法について学習する場を設定していきたい。



図2 「笑顔」の児童

(2) タブレット端末を使用する際の給食の献立表作り（小学部）

ア 対象児童の実態

小学部2年生の児童Aは、日常的にタブレット端末を使用して、ゲームをしたり、映像を見たりして余暇を楽しんでいる。学習面では、平仮名、片仮名を読んだり、書いたりするが、拗音や促音といった特殊音節を読んだり、書いたりすることが苦手である。また、字を書くのは力を入れ加減が難しいようである。食べ物に対する関心が強く、教師に給食の献立を読み上げてもらうことが好きである。

12月		9日		金曜日	
ぎゅうにゅう	わかめサラダ	ふりん			
チキンライス	かぼちのチーズあらい				

図3 Excelで作成した献立表

イ 活動の目的及び具体的内容

【目的】タブレット端末の表計算アプリを使って、給食の献立表を作ることで、タブレット端末の文字入力の仕方を学習するとともに、献立名を通して、特殊音節の表記の仕方に慣れる。

【内容】タブレット端末用表計算アプリのExcelで、当日の分の献立表のシート(図3)を作り、教師が各料理の写真やイラストを挿入しておく。当日の朝に、児童Aがイラストと対応させて、献立名をシートに入力する。

ウ 取組の成果

導入段階では、教師と共に操作方法を確認しながら1日分の献立表を作成していた。教師が読み上げた献立名を聞き取り、平仮名を入力した。「ぎゅうにゅう」の「ゅ」などの特殊音節については、最初は「ゆ」と大きな文字を入力していたが、繰り返していくことで、「ゅ」を入力したあとに「小」ボタンを押して、字を小さくするということを理解していった。操作方法に慣れてくると、紙面の給食の献立表を見ながら、同じように献立名を入力していくようになった。学習を続けること

により、給食の献立表に対する関心が高まり、4月からの献立表を見直したり、好きな給食の献立名を歌にして歌ったりした。特殊音節を読むこともスムーズになった。今後は、画像の挿入法を学習し、自分で1日分のシートを完成させられるように指導を継続したい。

(3) スケジュール機能を使った式典への参加（中学部）

ア 対象生徒の実態

中学部2年生の生徒Bであり、広汎性発達障害の診断である。発語はないが、理解言語は多く、簡単な言葉の指示を理解して活動する。しかし、大集団での活動や、体育館での活動では、活動の見通しを持つことが困難であり、情緒不安定になり自傷行為、他害行為が見られる。

イ 活動の目的及び具体的内容

【目的】卒業式や終業式などの式典に落ち着いて参加する。自傷行為、他害行為を減らし、本人の自己肯定感を高める。

【内容】「DropTalk」というコミュニケーション補助アプリを活用し、視覚的に分かりやすく正しい姿勢や静かにするとい

うことを伝えた。(図4)また、スケジュール表作成機能を活用し、式典のスケジュール表を作成する。(図5)スケジュール表は終わった活動を生徒本人が確認しながらチェックして行くようにした。

ウ 取組の成果

当初は自分の好きなアプリをしようとして、ホームボタンを押してアプリを終了しようとしていたが、アクセスガイド機能を使用し、ホームボタンを無効化することにより勝手にアプリを終了させようとする事はなくなった。また、画面を適当にタップして遊ぶことも多かったが、卒業式練習等で毎回活用することで、活動を終わったら自分で画面をタップして活動が終了したことを確認することで、因果関係が分かり、余計な操作をすることも少なくなっていく。また、写真ではなくイラストで分かりやすく見本を示すことで、イラストをよく見て正しい姿勢で着席する場面が多く見られた。今後はスケジュール機能だけではなく、簡単なコミュニケーションツールとしても活用していきたいと考えている。また、カメラ機能を活

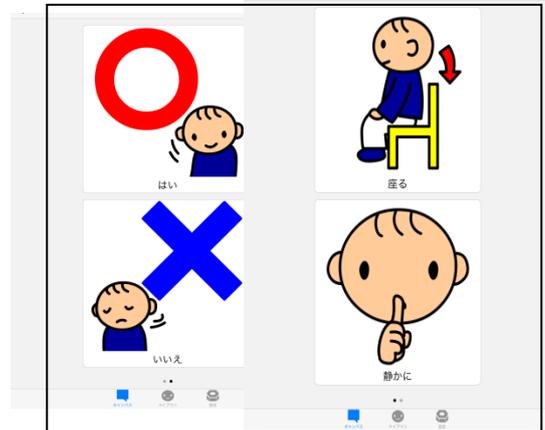


図4 DropTalkの画面2

イラストを活用した、コミュニケーションボードの一例。生徒の実態に合わせて写真等を使ってカードを作成することができる。



図5 DropTalkの画面1

コミュニケーションボードの一例。いろいろな行事のスケジュール表を作成し活用した。終了した活動の左端の「O」をタップすることで、色が反転し、死活的に分かりやすい。※アップデートによりタイマー機能が付き、終了までの時間も視覚的に分かりやすくなった。

用し、活動中の画像や動画を記録し、事後学習をすぐに行うことで、生徒へのフィードバックを素早く行い、指導に役立てていきたい。

(4) 時計組立てパズル (中学部)

ア 対象生徒の実態

中学部1年の生徒Cは、時計が読めない。パズルは好きであり、日頃からパズルには興味・関心が強い生徒である。

イ 活動の目的及び具体的内容

【目的】 昼休みを利用して短時間で楽しく時計について継続した学習をする。

【内容】 タブレット端末のアプリ (とけいパズル) を使用して時計の形のパズルを行う。時計盤のパズルの他、時計あわせのクイズもあり、順序立てて時計の針合わせや、アナログ時計の時間を読む練習が行える。効果音やBGMもあるので楽しく時計の学習が行えている。(図6)



図6 時計パズルの様子

ウ 取組の成果

パズルが好きで、時計の理解が難しい生徒であるが、昼休みの15分程度毎日喜んで取り組んだ。時計の文字盤の並びも分からない生徒だったが、回数を重ねていくうちに適当に当てはめていくのではなく、きちんと数字を選んで取り組めるようになった。タブレット端末で楽しく取り組めるが、プリント学習ではそれが反映されていない。時計の理解が定着するように他のアプリやプリント学習なども組み合わせ活用していきたい。

(5) キャンドルケーキ(図7)

ア 対象生徒

クラスの誕生日の生徒

イ 活動の目的及び具体的内容

【目的】 朝の会で誕生日を祝うときに誕生日気分を味わう。

【内容】 年齢を設定することによって、年齢と同じ数のキャンドルがケーキの上に現れる。キャンドルに火を付けて、目を閉じて、お願い事をする。タブレット端末に息を吹き付けて、あるいはタブレット端末を横に振ることによってキャンドルを消し、パーティーが始まる音楽が演奏され、風船が空を飛び、華やかにお祝いしてくれる。



図7 キャンドルケーキの画面

ウ 取組の成果

誕生日の生徒に朝の会でお祝いをした。ケーキ等無くても誕生日気分を味わえてうれしい気分になる。吹き消すことができない生徒もタブレット端末を振ることで消えるので、誰でも活用可能である。音楽も自分の好きな楽器を選べ、その音楽を聴いて喜んでた。

(6) 歯磨きアプリを使った歯磨き指導（中学部）

ア 対象生徒の実態

中学部1年のクラスの生徒である。障がいの程度は様々である。生徒は、給食後歯磨きを必ずしているが、自己流の方法で磨いている生徒が多い。あまり歯ブラシを動かさず口にくわえている時間が多い生徒や力を入れ短時間で磨く生徒、鏡を見ながら丁寧に磨く生徒と様々である。また、歯科検診の結果、歯科受診が必要な生徒も半数以上は受診していなかった。歯の健康について意識している生徒は少ない。

イ 活動の目的及び具体的内容

【目的】 昼食後の歯磨きの場面で使用し、磨き残しがないように、丁寧に磨く方法を学ぶ。

【内容】 タブレット端末を教室にある大型のモニター（50インチの液晶テレビ）にケーブル1本で簡単に接続できる。タブレット端末の画面を液晶テレビに出力することができるので、1クラス7人全員で、テレビ画面を見ながら内容を確認することができる。

使用するアプリは「5分歯みがき」で、このアプリは、5分間の設定時間に沿って画面に出ている歯の上を歯ブラシが動いていく。画面の歯ブラシの動きに沿って歯磨きをすれば、時間一杯歯磨きができる。

保健師による「歯磨き教室」の授業を受けて、磨き残しがたくさんあることが分かった。そのためこのアプリを使い、画面の歯ブラシと同じように歯ブラシを動かすことで、歯を順番に時間を掛けて丁寧に磨くことを学んだ。

ウ 取組の成果

6月から毎日実践し、給食後にアプリの音楽がかかると歯磨きをするように習慣付いた。（図8）11月8日のいい歯の日には養護教諭にも実践の様子を見てもらい、染め出しチェックも行った。以前より丁寧に磨けている生徒がほとんどであった。磨き残しがある生徒は歯ブラシの先が開いていたり、持ち方に原因があったりするようだった。歯磨きは個人であるものだが、時間を決めてクラス一斉に取り組むことで生徒もお互いを見合って丁寧に磨き、歯磨きに対する意識も変わったのではないかと思われる。また、他のクラスの生徒も音楽が流れると歯磨き道具を持って来て一緒に磨く生徒もいた。中学部1年生の実践であったが、小学校の段階からアプリを見て習慣化していくことが理想である。



図8 歯磨きの様子

(7) 国語での活用（高等部）

ア 対象生徒

高等部普通科3年生で、学習の習熟度は中程度、小学校低学年レベルの生徒である。

イ 活動の目的及び具体的内容

【目的】 授業内容の資料や思考する際の補助として使用する。

【内容】 (ア) 学校行事の修学旅行や文化祭の思い出作文を書く際に、大型テレビで行事の様子の写真を見た。まず写真を見て、行



図9 テレビ画面に出ている干支を呼び上げている

事を思い出した。

(イ) 新しい単元の物語に入るときに、事前に生徒にその物語の動画を鑑賞させた。

(ウ) 干支を覚える学習をする際に、Keynoteで干支のイラストと干支の読み方を大型テレビ画面に表示し、その画面に併せて干支を読む学習を行った。(図9)

ウ 取組の成果

(ア) 生徒からは写真を見ながら、「ここおもしろかったな。」や「この乗物乗った。」などそのときの様子を思い出したり、自分の気持ちを言ったりする姿があった。状況を思い出した上で、作文に取り組んでいた。

(イ) 物語の内容を知った上で、教科書の文章に入ったので、文字を読むことが苦手な生徒でも動画で覚えている事を手掛かりに質問に答えていた。

(ウ) 干支の順番にスライドで作成し、生徒のペースで流したので、生徒は自分のペースで読み上げることができ、達成感を得られた。

エ 国語以外での補助資料の活用

音楽の授業で音を表現するという内容のとき、生徒の要望で「獅子舞」の音を表現することとなった。そこでインターネットを使い獅子舞の動画を見て、それを参考にしながら生徒は太鼓をたたいて表現した。また、生徒が絵を描くときにはインターネットの画像と一緒にイラストを探し、生徒が描きたい絵にもっとも近いイラストを生徒自ら選び、作業に取り掛かった。

(8) ホームルームでの活用 (高等部)

ア 対象生徒

高等部産業科2年生。学期の始めや終わりに目標や反省を発表するのだが、恥ずかしいのかすぐに終わろうとするため、発表の内容が薄いことが多い。

イ 活動の目的及び具体的内容

【目的】決められた時間話すこと、時間内に話し終わるように話しの内容をまとめる能力を身に付ける。

【内容】3分スピーチを行わせた。(図10)タブレット端末のタイマーアプリ(赤タイマー)を使用し時間を可視化することで、残り時間を意識させ、話す内容の精選も行えた。



図10 3分間スピーチの様子

ウ 取組の成果

いつもなら生徒は、3分間スピーチという設定をしていても、簡単な目標や反省だけ述べて1分も立たないうちに終わっていた。タイマーを使い時間を可視化することによって、時間を意識し、3分間しっかり話そうとした。また、話す項目を設定していたので、それらを上手に3分間にまとめるよう努力する姿も見られた。発表の順番が後の生徒ほど3分の時間感覚に慣れ、上手にまとめられるようになった。このような体験を続けることによって、自分が伝えたい内容を過不足なくまとめ伝えられるようになればと思う。

(9) 通信機能を利用した交流学习（訪問教育）

ア 対象生徒の実態

高等部2年女子。四肢に強い緊張がある。側わんが進行しており、目と手の協応動作が難しい。他者と関わることを喜び、教師の言葉掛けに対して声を出して返事をする。慣れた人に対しては、自分から声を上げて要求を伝えようとする。タブレット端末に一定の関心はあるが、自分から画面に触ろうとする場面はあまり見られない。タブレット端末でビデオを再生したり絵本アプリを見せたりすると、画面に視線を向けていることが多い。在宅で生活して、福祉施設を利用している。自宅でタブレット端末を使用する機会はほとんどないが、施設でのリハビリではタブレット端末を使用することがあるようだ。

イ 活動の目的及び具体的内容

【目的】 同年代の生徒との関わりを増やし、人間関係を形成する。集団での活動の場を確保する。

【内容】 「face time」を利用(図11)。訪問教育の授業場所と本校の教室をテレビ電話でつないで、お互いに顔を見ながら交流した。学期に1回程度実施。2学期は、後日本校で行われる交流の事前学習として行った。訪問教育の授業場所では、教師がタブレット端末を三脚に固定し、生徒の視界に入るようにした。本校の教室では、タブレット端末をテレビに接続して全員で見られるようにした。内容については、本校の教師と打合わせて決めた。最初に、訪問教育の生徒の誕生日が近かったので、本校生徒が誕生日の歌を歌って祝った。訪問教育の生徒はそれを聞いて、声を上げてうれしそうに笑った。続いて、本校での交流の事前学習をした。交流で劇をする予定だったので、その配役を決めた。本校生徒が一人ずつ劇のせりふを言い、その様子を訪問教育の生徒が見た。活動全体を通して、よく画面に注目していた。タブレット端末に映る本校生徒に話し掛けられ、笑顔で声を上げて返事をする場面が印象的だった。

ウ 取組の成果と課題

訪問教育の生徒は学校に行く機会が少ないので、行事等で登校したときには緊張する場面があったが、タブレット端末のテレビ電話機能を利用しての交流を重ねることで、訪問教育の生徒が本校生徒に慣れ、人間関係ができていく様子が見られた。テレビ電話では、本校生徒に話し掛けられて返事をするだけでなく、自分から声を出して本校生徒と関わろうとしていた。人との関わりを深める様子に成長が感じられた。本校生徒にとっても、本校での交流の前に事前にタブレット端末で通信して交流することで、当日にスムーズに関わる姿勢が見られた。授業等の関係でテレビ電話ができないときは、画用紙に手紙を書いたりタブレット端末でビデオレターを作ったりして交流の回数を増やした。



図11 face timeでの会話の様子

テレビ電話を利用しての交流では、お互いが画面を見ながら話し掛ける、という活動が多くなりがちで、ある程度コミュニケーションをとれる生徒には良いが、反応が少ない児童生徒にとっては、一方的な関わりになる。集団での活動の場の確保は訪問教育にとって大きな課題であるため、タブレット端末の通信機能を積極的に活用したいが、反応の微弱な児童生徒にどのように活用していくかは今後の課題と言える。コミュニケーションのとれる児童生徒にとっても、画面を見ながら会話を

するだけでなく、離れた場所で同時に同じ活動に取り組めるような交流を行えると良いと思う。

エ その他の取組

絵本アプリを用いて、読み聞かせを行った。画面に触れると音が鳴ったり絵が変わったりするのを喜び、積極的に触ろうとする児童生徒もいる。画面を「見る」という行為が画面上の光や絵の動きに「気付く」ことにつながっている。そして、画面の変化に「気付く」ことがタブレット端末に自発的に関わろうという意欲を促している。今後は、スイッチ教材を用いることでより操作しやすい環境を作り、自分でページをめくって話を進めるなど、楽しみながら児童生徒の保有する感覚を活用することにつながれば良いと思う。

4 今後の課題

近年スマートフォンやタブレット端末の普及により、教師の保有率も高くなってきた。そしてそれを活用しようとする姿も若い世代を中心に増えてきている。ICT機器はどんどん身近にはなっているのだが、それを使用する際の問題点も多く存在する。

一番の問題点は利便性と情報管理との関係である。本校にあるタブレット端末はiPadが10台あるが、これは5～6クラスに1台の割合にしかない。コミュニケーションツールとしてやスケジュール管理などを支援する場合は常に持つ必要があるが、日常的にクラスの活動や授業で活用する場合は台数が足りず、教師個人のスマートフォンやタブレット端末を使用している教師も多い。また、校内LANの回線は遅く、Wi-Fiなどの環境も整っていない。そのため教室のパソコンや校務用のタブレット端末でインターネットを活用して調べ物学習や動画を見ることなどはできない。そこで、ここでも教師個人のスマートフォンやタブレット端末を利用することが多い。私物でインターネットの活用や加工をしないアプリケーションの使用だけでなく、生徒の顔写真を使用したりすると個人情報の問題が生じることとなる。校務用のタブレット端末の台数を増やすことも予算的に難しく、生徒個人のタブレット端末の使用については、就学奨励費の活用など補助とかな環境は整っているが、今まで持ち込みの事例はない。

スマートフォンやタブレット端末の支援や学習のためのアプリケーションは数多くあるが、アプリケーションを使用するときは、そのアプリケーションを活用するための使い勝手を見極めることや、習得期間が必要であり、また加工期間が必要な場合もある。これらの時間は当然校務時間内には収まりきらない。研修を行うにしてもやはり日々忙しい校務の中では度々時間を取ることも難しい。しかし、小学部から高等部までの一連の活動の中で、ICT活用の引き継ぎも必要となる。進級し担任が替わってもそれまでの支援が同じように続くことが望ましく、そのためには教師全員がICT活用能力を身に付けておく必要がある。教師がICT活用能力を身に付ける時間をいかに確保するのも今後の大きな課題である。

このようにICT・AT機器は身近に存在するが、設備面や情報管理、時間など多くの課題や問題がある。これらの課題や問題を少しずつでも解決しつつ、児童生徒の生活や学習活動がより良く行えるようにするために、これからも研究を続けて行く必要がある。